

図表1. 古事記登場順の神名表

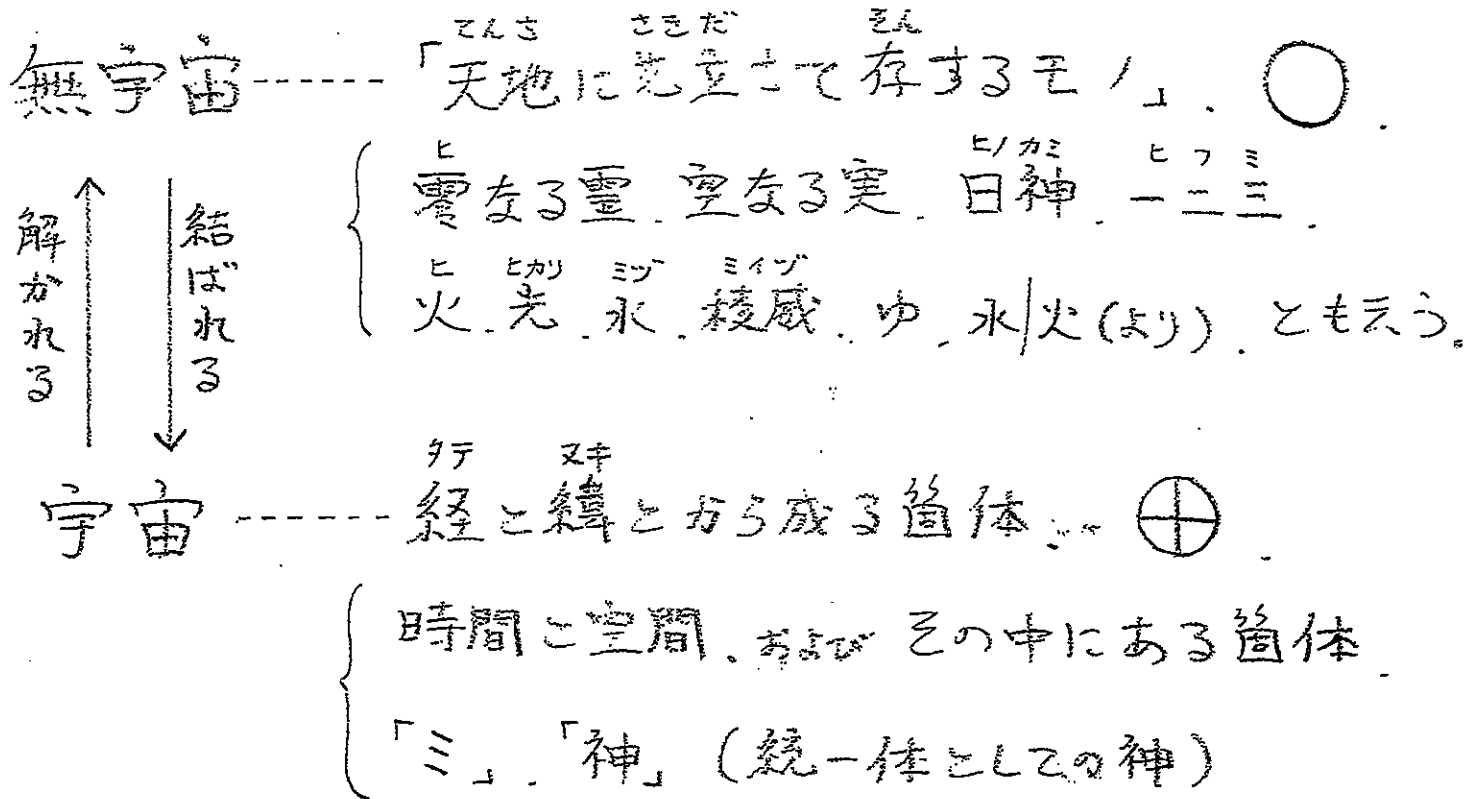
No.	神名	分類	注釈	
1	天之御中主神	↑ コトアマツカミ ↓	アマノミナカマシノ オホミカミは、 こちら側に重点を 置いた神名。	
2	高御産巢日神			
3	神産巢日神 ヒ			
4	宇麻志阿斯訶備比古遲神			
5	天之常立神			
6	国之常立神			
7	豊雲野神 ヒ			
8	宇比地邇邇神	↑ アマツカミ ↓	イザナギノオホミカミ は、この十柱神に 重点を置いた神名。	
9	須比智邇邇神			
10	角杵神			
11	治杵神			
12	意富斗能地神			
13	大斗乃辨神			
14	於母陀流神			
15	阿夜訶志古泥神			
16	伊邪那岐神) タマ
17	伊邪那美神			
18	伊邪那岐命) アマツカミノオホセ 天神諸命		
19	伊邪那美命			
20	大事忍男神	↓ クニツカミ	(二柱御祖神)	
21	豊宇氣毘売神			
22	豊宇氣毘売神			

三日月、伊邪布支命、伊邪布美命、二柱御祖神

天
(天)
無宇宙
↑
瑞垣
↓
宇宙
(国)
ニ

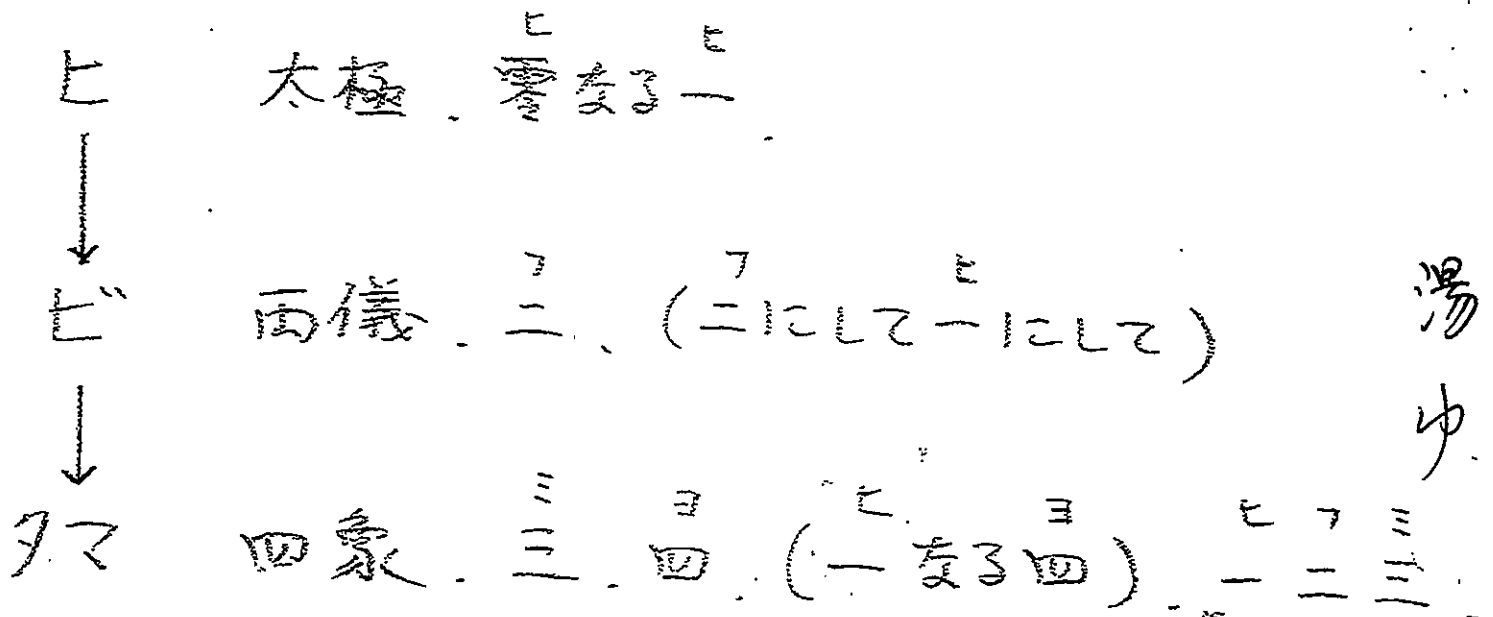
No.20~59.の40神は、「神生み」で生まれた神々。

秘稿「全宇宙」のまとめ



また、多田雄三は「古」という漢字を「十」と「口」とに分解した上で、その「口」は ○ の楷書であり、その「十」は ⊕ の省略形である、と解釈している。

- ----- 無宇宙。零で霊で。時間や空間を脱却してそれらを産み出しているところの「主体」。
- ⊕ ----- 宇宙。上に述べた「主体」の「活用」として表出されたところの時間と空間。



(火 (ノ)) ----- 「アホバ」
 (水 (ノ))

→ 以上まとめて「天地に先立ちて存する物」

「陰陽不測之神」

以上すべて「無宇宙」の話

拙稿「数理(一)のまとめ」参照



無

ヒの段階

↓ ムスビ
産靈

種子の種子 (イムスビ、クルムスビ、タマツメムスビ)
→ 一、火、^{ヒラミ}零海の^ヒ零 (太極)



宇

ヒの段階

↓ ムスビ
産魂

種子 (イムスビ、クルムスビ、タマツメムスビ)
→ 二、^フ經 (經過) (兩儀)



宙

タマの段階

発芽したる種子 (イウタマ、クルタマ、タマトマルタマ)
→ 三、^ミ身 ; 同時に、^ヨ四、^ヨ世 (四象)
(ヨ、は無宇宙と宇宙の間を遷流する)



ミゾガキ
場相

「完全に成立した筒体」の段階 → ^イ五

宇

{ 中心 ---- 種子 (ヒフミヨ)
外郭 ---- 資料 (ム、空零、ウシビ)

宙

→ 即ち「空零」とは、まだ「筒体」の中に組み込まれていない、「遊離した資料」である。「零」と同質ではあるが、もはや「中心」を形成する可能性はなく、その点が「一」とは全く異なっている。

〈「ヒ」の存在様式の三段階まとめ〉

() 内は「言霊の章」の頁数、〈 〉内は「修験講義録」の頁数。

1. 「^ヒ零の海」に充滿する「^ヒ零」そのもの。 ○^ヒ

{ 統一不可分の^ヒ零 (90) . 統一不可分の^ヒ靈 (80) .
^{ミムスヒ}三産靈 (^{イクムスヒ}生産靈 . ^{クルムスヒ}足産靈 . ^{タマフメムスヒ}玉積産靈)
^ミ実としての^{ミタマ}御靈 (以上. 130) .

これが ↓ ^{ムスビムスビ}産靈産魂て

2. ○^ヒと○^ヒとの複合体。 ◎^ヒ (136) . ⊕^ヒ (68) . ⊙^{カミ} (72) .

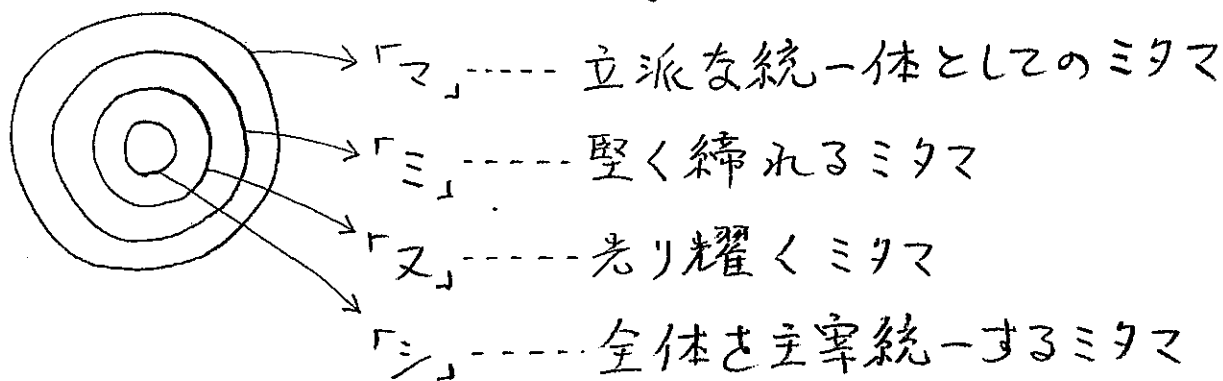
{ タマノヲ . ミヅホ . イノヲ . 千変万化する^{ウシビ}靈魂 . ヒの活用 (89)
^ヲ経と^ヲ緯 . ^ヲ男と^ヲ女 . ^凸と^凹と (91) . タカミムスビとカミムスビ (68)
^{ミムスビ}三産魂 (^{イクムスビ}生魂 . ^{クルムスビ}足魂 . ^{タマフメムスビ}玉留魂)
^ミ身としての^{ミタマ}御魂 (以上. 130) . 三不可分の^ヒ魂 (80) .

その種子が ↓ 芽をますと <84>

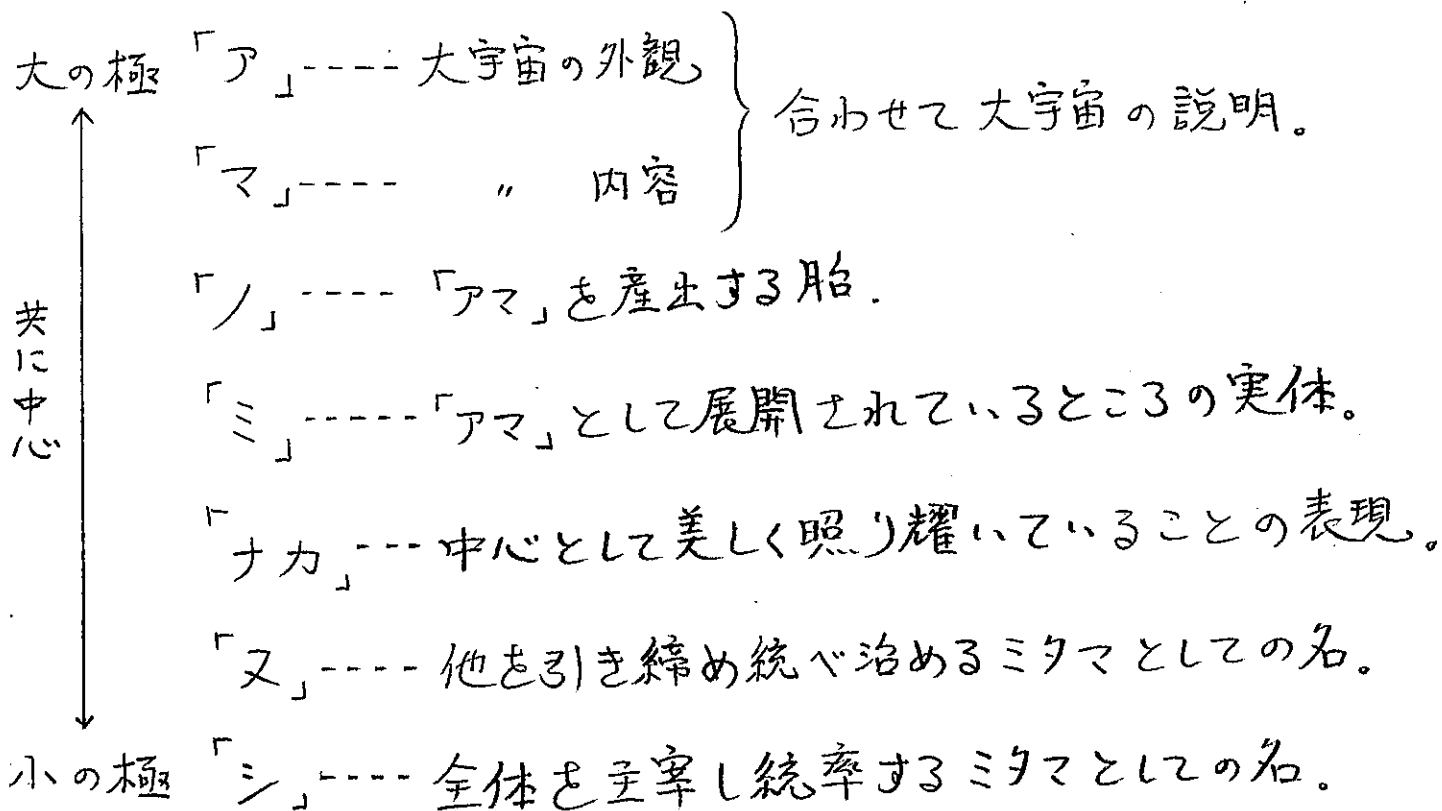
3. 筒体としての成立。 ⊙^ミ . ⊕^ヒ . ⊕^ヒ (36) . ⊕^{マラ} . ⊕^ヒ (78.末)

{ ^ヲ経と^ヲ緯との相交わりたるもの (91) .
 不^ヒ一不^ヒ二不^ヒ三の玉 (^{イクマ}生玉 . ^{クルマ}足玉 . ^{タマツルマ}玉留玉) <80>
 人間身の上では 根本魂 ^{フホヒ}直日 <132>

川面流-----すべての統一体は「マ・ミ・ヌ・シ」の四重構造
を成している。(191頁~192頁)

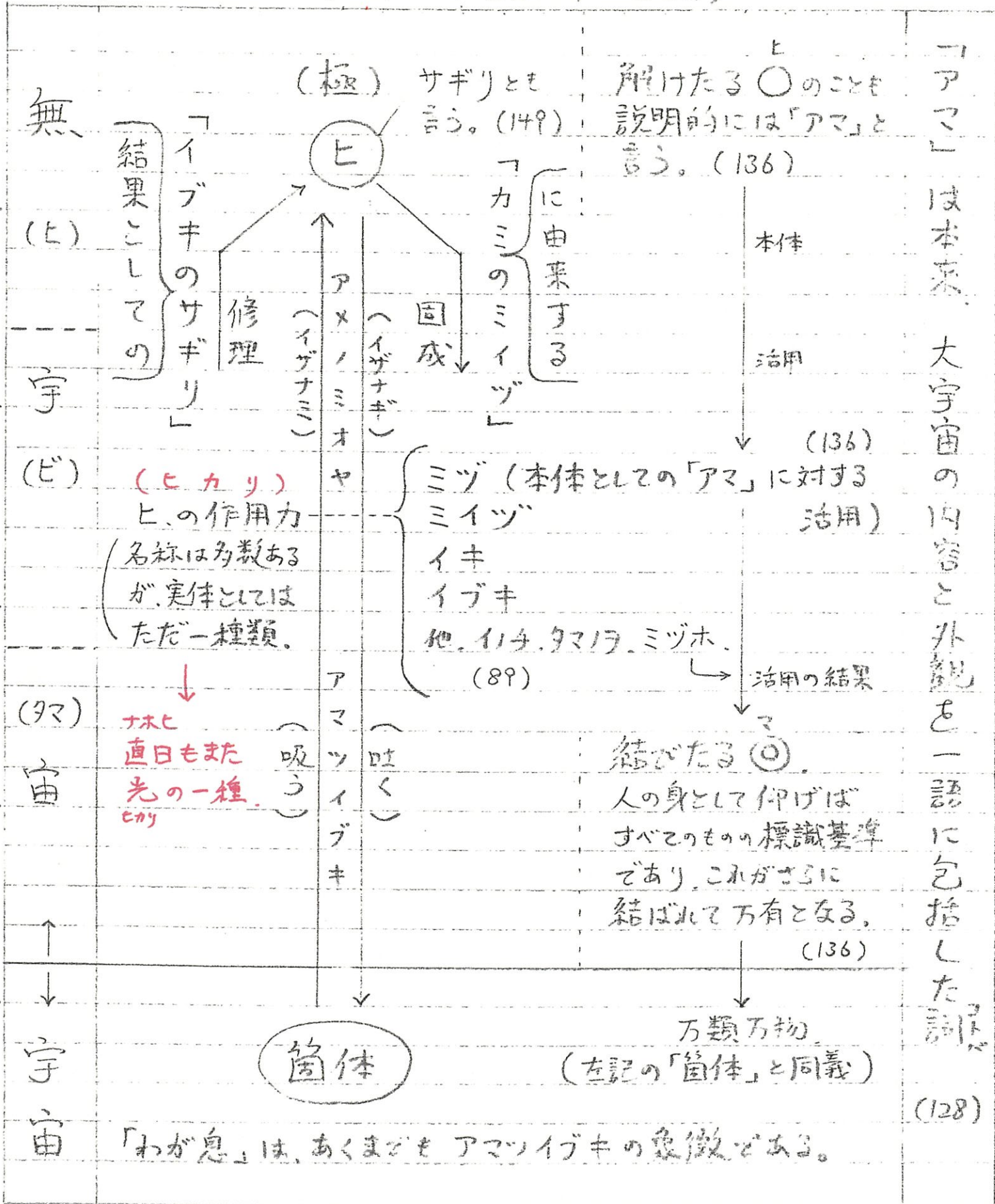


多田流-----「大の極」と「小の極」は共に「中心」である。

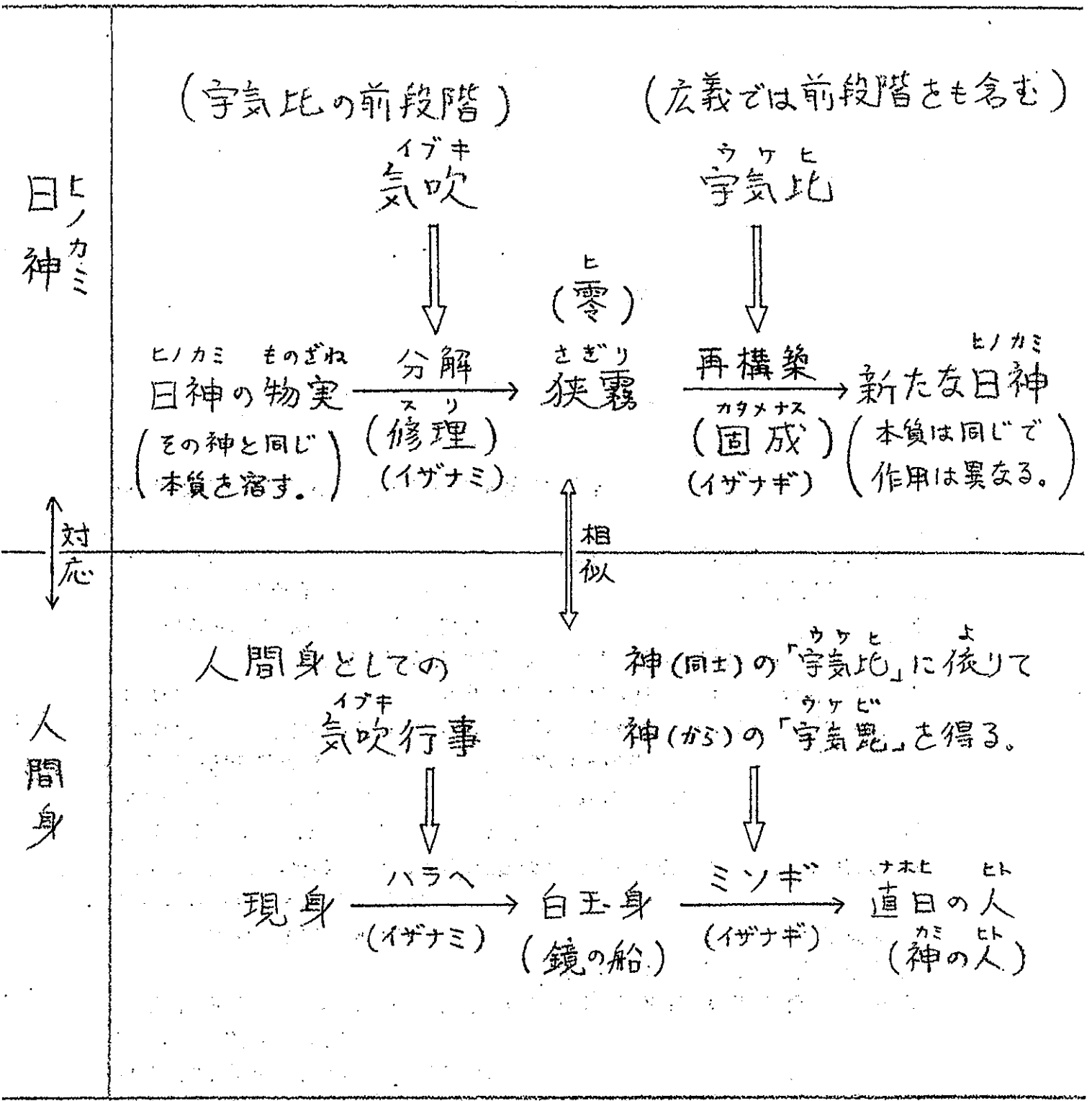


⇒ 「アシ」の秘言。「ウマシアシカビヒコヂ」の産魂言。

(カッコ内の数字は、アア言葉の章の頁数)



「イブキ」と「ウケヒ」



上段の用語は④ 147頁ほかより。

下段の用語は「日本民族の信仰」(-)より。

筒之男命・上津綿津見神・上筒之男命。天照大御神・月讀命・建速須佐之男命。十四柱神は、生れさせ給ふ。その生れさせ給ふとは、伊邪那岐大御神の「御身之禊」オホミマノハラヘであつて、神國樂園の築き成された曉である。その十四柱神と稱へまつるは、そのまま、伊邪那岐大御神と稱へまつる三柱の貴子にてましますなれば、天津日子日子番能邇邇藝尊と仰ぎまつる天皇にてあらせらるるのである。

アナカシコ
畏矣。

「仰ぎて見れば、天津日は、二つはあらず。人の世の、大天皇は、一柱」とは、スメラミコト竺紫日向之橘小門之阿波岐原の禊の約言だと云ふことが出来よう。

天津日は二つはあらず。根本中心たる直日は、唯一不二である。唯一であるから、重重無盡又無量である。此のままに、無量無限であるから、各自各自が各自各自に、其の所有せる根本直日を明め得ない。全人類統率の大天皇を拜みまつることを知らない。まことに憐むべく悲しむべきの極みである。覺めよ。醒めよ。覺醒め來つて、此の火を仰げ。此の日を讚へよ。其處は大平等海にして、一碧瑠璃の光明世界で、平和嘉悦の高天原で、豊葦原の水穂國で、全人類世界此のままの樂園で、天國で、極樂淨土とも呼ぶのである。

第十一の、「天之眞名井」とは、宇氣比と云ふに等しい。

宇氣比とは、「汗氣伏せて、踏み登杼呂許志」たるもので、「汝が心の清明きこと」を知るもので、「天安河を中に置いて、十拳劔を、三段に打折る」ものである。

さうして、「物實を、天之眞名井に振滌ぐ」ものは、天安河の禊で、天照大御神の祕事としての、御子生みなる「氣吹の狹霧」である。其の氣吹の狹霧とは、◎と畫きて、水火既濟と支那人の稱する「ミヅホ」で、☰☵と

産靈産魂の神言靈 フフム タマノヲ ミヅホ

晝くのは、陰陽和合で、地天泰平なので、和魂ニギミタマたる大平等海裡に、直ナホビ毘としての火を孕めるもので、古言に、「フフム」と傳へたるところ、「フフム」とは、袂襖の義であると共に、その結果でもある。袂言としての「フ」と、「フ」とを重ねて、それを結ぶに、「ム」の音を以つてして一語を成したので、生産の義で、産靈で、産魂で、産靈産魂である。その産靈産魂結び止めたる玉緒を、「ミヅホ」と呼ぶ。

玉の緒を、結び結びて、人の身は、伊着くなるなる、天安河。

「タマノヲ」とは、「五件緒」で、「八十神」で、「八上比賣」で、神としては、「八神」で、人としては、「八千魂」で、「八十萬魂」で、物としては、分分個個で、天上にては、群星で、地下にては、妖類魔族で、分散しては、邪惡醜陋で、死と呼ばれ、統一しては、善美正誠で、生と云はるるのである。

ところが、人は生を喜び、死を惡む癖が有るので、「タマノヲ」をも、「命イノチ」と呼びて、生けるものとか、生くべきものとかの義に用ゐる來つた。けれども、「タマノヲ」も、「イノチ」も、本來は生死シジを通じて、千變萬化するクシビ靈魂なりとの義で、「ヒ」を活用の方面から觀て名づけたのである。それで、それがまた直に、燃ゆるものであり、流るるものであり、上るものであり、下るものであり、暖きものであり、冷きものであり、尊きものであり、卑きものであり、天で、地で、陰で、陽で、死で、生で、水火である。それで、「ミヅホ」と呼ぶのである。

「ミヅホ」の「ミヅ」は、水で、滋潤ミツで、稜威ミツで、瑞祥ミツであつて、經タテと緯ヌキとで、十トラである。その「ホ」とは、火で、穗ホで、秀ホで、高く明に顯れたるものである。此の二語を合せたる「ミヅホ」とは、奇靈異變の實體であり、妙用であるとの義で、それをまた、稱詞として「水穗國ミツホノクニ」と用ゐては、萬物備はりて、瑞祥到り、稜威赫灼として、百姓潤澤なるもので、太平嘉悅の神國樂園なりとの義である。

此の神國樂園を築くべく、モノサネ物實たる資料としては一切合切を、天之眞名井に振滌ぐと云ふのは、資料を整理するもので、神としての上では、「八十伴緒を統ふるもので、五伴緒を率あるもので、八十神を打平ぐるもので、八上比賣を得給ふもので、大直日神が、八神の亦の御名に「てまします」ので、人としてならば、八千魂を統一するものである。八千魂の統一したる暁には、人の心身ながらの神なので、之を説明的に云へば十で、一二三四五六七八九十であるが、其の實相は、一なる零である。

此の零が、天之眞名井なので、白玉光底に潺湲たるの泉である。古來、之を「本打切り末打斷ちたる天津金木」と傳へたのは、太邇邇の祕言で、極を教へたので、「與天壤無窮者」で、經としての時間を超えて居るから、緯としての空間を忘れて實在するもので、之が、人間世界に傳承したる「カミ」である。

ところが、人間身は、雜糅混淆なために、此の極を窮め得ないで、小我の見地に居て、神界を憶測するから、まるで、トンチンカンな悲劇が演出される。

ウケウツネ汗氣船を踏みとどろこし、天宇受賣、かみかかりすも。うつむろにして。

「ウツムロ」と古典に傳へたのは、神吾田鹿葦津比賣の宇氣比で、戸無き室と記して、零界虚空の義なることを教へてある。「虚空中にして御子の生れます」とあるものも、また固より此の零位なので、ムスヒツカミクラ三産靈神座である。三産靈神座は、零で、極で、一であるから、天之眞名井と稱へて、神代の神の神座である。此ここに生れさせ給ふは、別天神で、隱身に「てまします」。

ところが、「天照大御神は、建速須佐之男命の物實を執らして、此の天之眞名井に振滌ぎ給ふのであるから、物實を純一不可分の零に摧きて、更に吹き生し給ふの義で、其の吹き成し給ふは、ヌサトモキユラ「奴那登母母由良に振滌ぎて、

佐賀美爾迦美」給ふのである。

「ヌナトモモユラ」とは、「内は富良富良、外は須夫須夫」と云へるもので、「妻須世理毘賣」の教で、箇體成立の神業である。「サガミニカミ」は、噬み咬むので、作り成すものである。之を換言すれば、「ヌナトモモユラ、サガミニカミ」とは、修理固成の義で、天沼矛の神儀尊容で、「二柱神が、淤能碁呂嶋に天降りまして、天之御柱を見立て、八尋殿を見立て、其の妹に、汝が身は如何に成れると問ひ給へば、吾が身は、成り成りて成り合はざるところ一處在りとまをしたまひ、伊邪那岐命の御身は、成り成りて成り餘れる處一處在りと詔りたまひ、成り餘れる處を以て、成り合はざる處に刺し塞ぎて、國土を生み成さん」と、相互に契りて、身と言と意との統一するにあらざれば、神界を築き得ざるものなることを垂示したまへるもので、「成り合はざる處」とは、女で、凹で、陰で、コと描くので、數としての二であると共に五で、それは緯である。「成り餘れる處」とは、男で、陽で、ヒと描くので、數としての一であると共に六で、之は經である。

緯なる女とは、滋潤であり、水であつて、罔象女と傳へたる水神である。之を二だとは、成り合はざるが故であり、また之を五だとは、成り成りて子女を産出するの母胎であるからなのである。經なる男とは、稜威で、火で、「迦具土神」で、地界の主神である。そこで、之は、男としての一で、母たる二に對しては六である。六と云ふのは「ム」で、結びたるもので、五なる成數より産出せられたる一で、之を六なる一と説明するのである。之が、天地否塞の祕數である上からは、また、零なのである。

それは兔に角として、此の經と、其の緯との相交りたるものが、國土であり、人であり、天神で、地祇で、天地で、泰否で、神魔である。

一 名義未詳。
二 目と目を見合わせて(心を通じる意)。

三 蛇を撥う呪力をもった領巾。領巾は上古女子が頸にかけて左右に垂らしたもので、今のマフラーのようなもの。旧事本紀を見ると、饒速日命の天降の時、天神から授けられた瑞宝十種の中に、「蛇比礼」と「蜂比礼」がある。
四 おつと(夫)の意。ヒコは男、ヂは男性を示す接尾語。
五 振つての意。
六 翌朝、蛇の室からお出になつた。
七 翌日。
八 蜈蚣の略字。
九 鏑のついた矢で、空中を飛ぶ時、鏑の穴に風が入って鳴るので鳴鏑という。鳴鏑は漢語(史記)。

一〇 ぐるっと周囲を焼いた。
一一 どこから遁れ出てよいかわからなかつた時。
一二 内部はうつろで、外部は窄(せま)んでいる。
一三 そのほら穴の中に落ちて、身体が隠れ入つた間に、火は穴の外を焼け過ぎた。

一四 夫は死んだと思つて、葬式の道具を持って。

所に參到れば、其の女須勢理毘賣出で見て、目合爲て、相婚ひたまひて、還り入りて、其の父に白ししく、「甚麗しき神來ましつ。」とまをしき。爾に其の大
神出で見て、「此は葦原色許男と謂ふぞ。」と告りたまひて、即ち喚び入れて、
其の蛇の室に寝しめたまひき。是に其の妻須勢理毘賣命、蛇の比禮二字は音を以るよ。を其
の夫に授けて云りたまひしく、「其の蛇咋はむとせば、此の比禮を三たび舉り
て打ち撥ひたまへ。」とのりたまひき。故、教の如せしかば、蛇自ら靜まりき。
故、平く寢て出でたまひき。亦來る日の夜は、吳公と蜂との室に入れたまひし
を、且吳公蜂の比禮を授けて、先の如教へたまひき。故、平く出でたまひき。
亦鳴鏑を大野の中に射入れて、其の矢を採らしめたまひき。故、其の野に入り
し時、即ち火を以ちて其の野を廻し焼きき。是に出でむ所を知らざる間に、鼠
來て云ひけらく、「内は富良富良、此の四字は音を以るよ。外は須夫須夫。此の四字は音を以るよ。」といひき。
如此言へる故に、其處を踏みしかば、落ちて隠り入りし間に火は焼け過ぎき。
爾に其の鼠、其の鳴鏑を咋ひ持ちて、出で來て奉りき。其の矢の羽は、其の鼠
の子等皆喫ひつ。

是に其の妻須世理毘賣は、喪具を持ちて、哭きて來、其の父の大神は、已に
死にぬと思ひて其の野に出で立ちたまひき。爾に其の矢を持ちて奉りし時、

つてゐるのは附会の説である。

二 大地の鳴動する音を聞いて目を覚まして。
二 腹違いの兄弟。ママはイロに對する語。

三 坂の裾の長く延びたところ。
三 お前とか、おぬしとかの意。第二人称の卑稱。神武紀に「爾、此云ニ飲例。」の訓注がある。

四・五 この國の支配者となるべきための数々の試験に堪えて、武力的(政治的)支配力(生大刀・生弓矢)を身につけて大國主神となり、呪的宗教的支配力(天の詔琴)を身につけて宇都志國玉神となるのである。

六 正妻。新撰字鏡に嫡は適と同じで、「牟加比女」又は「毛止豆女」とある。

七 出雲風土記に出雲郡宇賀郷がある。その山。

八 この訓注は「山」の字の上にあるべきであるが、諸本皆、「山」の下に記してゐる。

九 延喜式祝詞に常套的に用いられてゐる語句「下都磐根爾宮柱太知立、高天原爾千木高知臣」(祈年祭)、「下津磐根爾宮柱太敷立、高天原爾千木高知臣」(六月晦大祓)、「下津石根爾宮柱広知立、高天原爾千木高知臣」(春日祭)などがそれである。また大殿祭祝詞には「底津磐根」の語がある。地底の磐に宮殿の柱を太く掘り立て、

天空に垂木を高く上げて、わが物として領する意。「知り」「敷く」は共に治める、又は領する意。千木・氷椽を記伝には眩木(眩)の意として

いるが、千木は風木(砂)即ち風を防ぐ木、氷椽は日本(即ち太陽を防ぐ木の意(椽の字を書いて

いるから垂木であろう)と解したら如何であらうか。要するにこの対句はりっぱな宮殿を作る

稱辭。

二 賤しい者の意。

上 卷

家に率て入りて、八田間の大室に喚び入れて、其の頭の虱を取らしめたまひき。

故爾に其の頭を見れば、吳公多なりき。是に其の妻、牟久の木の實と赤土とを

取りて、其の夫に授けつ。故、其の木の實を咋ひ破り、赤土を含みて唾き出し

たまへば、其の大神、吳公を咋ひ破りて唾き出すと以爲ほして、心に愛しく思

ひて寝ましき。爾に其の神の髪を握りて、其の室の椽毎に結び著けて、五百引

の石を其の室の戸に取り塞へて、其の妻須世理毘賣を負ひて、即ち其の大神の

生大刀と生弓矢と、及其の天の詔琴を取り持ちて逃げ出でます時、其の天の詔

琴樹に拂れて地動み鳴りき。故、其の寝ませる大神、聞き驚きて、其の室を引

き仆したまひき。然れども椽に結びし髪を解かず間に、遠く逃げたまひき。故

爾に黄泉比良坂に追ひ至りて、遙に望けて、大穴牟遲神を呼ばひて謂ひしく、

「其の汝が持てる生大刀・生弓矢を以ちて、汝が庶兄弟をば、坂の御尾に追ひ伏

せ、亦河の瀬に追ひ撥ひて、意禮^二二字は音^一。大國主神と爲り、亦宇都志國玉神と爲

りて、其の我が女須世理毘賣を嫡妻と爲て、宇迦能山^三三字は音^二。の山本に、底津

石根^四四字は音^三。に宮柱布刀斯理、高天の原に氷椽多迦斯理^五四字は音^四。て居れ。是の

奴^六といひき。故、其の大刀・弓を持ちて、其の八十神を追ひ避くる時に、

坂の御尾毎に追ひ伏せ、河の瀬毎に追ひ撥ひて、始めて國を作りたまひき。

三 賢いすぐれた女がいるとお聞きになつて。
四 容姿の妙なる女。

五 キカシと同じ。敬語の助動詞スが四段活用動詞に接する場合は、ア列の音を受けるのが通例であるが、オ列の音を受ける場合もある(知らず・知ろす)。
六 「さ」は接頭語。求婚に。
七 「あり」は動作の継続する意、「立つ」は出立する意。常にお出かけになり。

八 アリカヨハシ即ち常にお通いになりであれば穏やかであるが、カヨハセと已然条件法(古くは「ば」が無くともそのまま条件法となつた)となつてお通いになるので、お通いになるのと解するより外に仕方がない。
九 大刀の下げ緒。
一〇 着衣の上に重ねて着る衣装で、後世の被衣(かぶり)のようなもの。男女共に用いた。
一一 解かないのに(旅装のまま)。
一二 寝ている家の板戸を。「や」は感動の助詞。
一三 「押そ—ぶる」に継続を示す助動詞「ぶ」が接続した語。激しく押す意。ブルは荒ブル・道速ブルのブルと同じであらう。

4 沼河北売求婚

一四 ここから第一人称的発想に交つてゐる。直訳すると、私がお立ちになつてゐるとなるがこの敬語表現は、八千矛神に対する第三者の敬意を示したものと思われる(この歌の冒頭参照)。
一五 何度も引いて。
一六 哀調をおびて鶴が鳴いた。一七 「さ」は接頭語。雉の枕詞であるが、野の意味を漂わせてゐる。一八 雉が鳴き叫ぶ。雉は夜明けに鳴く。一九 鶏の枕詞であるが、庭の意味を漂わせてゐる。やがて夜も明けようとして山では鶴が、野では雉が、家の庭では鶏が鳴く意である。山↓

故、其の八上比賣は、先の期の如く美刀阿多波志都。此の七字は首を以るよ。故、其の八上比賣をば率て來ましつれども、其の嫡妻須世理毘賣を畏みて、其の生める子をば木の俣に刺し挟みて返りき。故、其の子を名づけて木俣神と云ひ、亦の名を御井神と謂ふ。

此の八千矛神、高志國の沼河北賣を婚はむとして、幸行でまじし時、其の沼河

比賣の家に到りて、歌ひたまひしく、

八千矛の 神の命は 八島國 妻枕きかねて 遠遠し 高志の國に 賢し

女を 有りと聞かして 麗し女を 有りと聞かして さ婚ひに あり立た

し 婚ひに あり通はせ 大刀が緒も いまだ解かずて 襲をも いまだ

解かねば 嬢子の 寝すや板戸を 押そぶらひ 我が立たせれば 引こづ

らひ 我が立たせれば 青山に 鶴は鳴きぬ さ野つ鳥 雉はとよむ 庭

つ鳥 鶏は鳴く 心痛くも 鳴くなる鳥か この鳥も 打ち止めとせね

いしたふや 天馳使 事の 語言も 是をば

とらたひたまひき。爾に其の沼河北賣、未だ戸を開かずて、内より歌ひけらく、

八千矛の 神の命 ぬえ草の 女にしあれば 我が心 浦渚の鳥ぞ 今こ

そは 我鳥にあらめ 後は 汝鳥にあらむを 命は な殺せたまひそ い

それは兎に角として、私どもが歌を詠むのは、詞として教へられた神を讚美しつつ、我もまた神の完きが如く完かんと願ふので、作歌に志すものは専念一意神の御教を仰ぎまつるべきである。

神の教へ給ふ歌ウタノコトバ 詞は幾種幾様であるか、人の身として知り得るところではない。人は唯、教へられたる範圍内で、知り得たることを褒め讚へ歌ひまつれば可いのである。

以上第一章 終

第二章 歌詞の基準

○大宇大宙に標識基準を示し給ふ天之御中主神とは、換言すれば原型である。宇宙構成の基準である。之れを人間の位置から仰げば原型の原型のそのまた原型である。それは、純一不可分の靈ヒで、極小の一ヒで、極大の靈ヒで、其の御活用を人間的には二柱御祖神と仰ぎ伊邪那岐命伊邪那美命二柱神と称へまつるのである。其の原型が中心たる位置に着かせたまへる時には主の神天照大御神にたまはしますのである。其の時の御有様を「伊邪那岐命大歡喜詔。吾者生生子而。於生終得三貴子。即其御頸珠之玉緒母由良邇。取由良迦志而。賜天照大御神而。詔之。汝命者。所知高天原矣。事依而賜也。故其御頸珠名謂御倉板拳之神」と古事記に載せてある。

御倉板拳之神とは伊邪那岐命の御頸珠である。それをお持ちになつて天照大御神は高天原を御統治遊ばれたのである。物に寄せまつりては御頸珠と称するので、「それを持ちて」と白しますが、その物を忘れて観れば、「於

を種子とし資料として天照大御神の高天原は築き成さるるのである。

けれども、其の「築き成さるるのだ」とは、仮に客観し得たりとしての説明であるから之もまた事実ではない。事實は産靈産魂たる玉緒で、其の完成された簡体は国常立尊とたたへまつるのである。

簡体を示したる神は国常立尊と称へて、一円一音昭昭琅琅の光であるが、此の簡体とは宇宙の中に在る宇宙で、宇宙無き宇宙と等しき実在で存在であるから、零に等しくして零ではない。○だと云ふのである。此の○とは人の眼に仰ぎ見る名称であるが、印度の古典には「其の御声を観て解脱るべきなり。妙音觀世音梵音海潮音・普門示現」と伝へて○の音を教へ、猶太の古典には「詞は神なりき」と伝へ、日本の古典は「言靈の幸・葛城一言主・天成音棚機」と教へて、白玉光底泉瀑溪の零を悟証る方便を遺されたのである。

専心一意神の言靈を称へまつれば、其処は神の国で其の人は神の人で○の天地で国常立尊の幸である。

国常立尊の幸としての人が神の教へのままに詠む歌は等しく国常立尊の幸である。之を統一魂と称へ妙音天鼓と仰ぐ。輒、神音で言靈である。

此のやうな國を高天原ととなへて日止と呼ぶのは、完全圓成の宇宙である體であるとの義である。

ですから日止（ひと）と呼ぶ人は國家統治の全權であり完全圓満なる上下である。

言ひ換へると、日本天皇を日止にして、日本天皇國を日止にして高天原にして有道と云ふのである。

ひとみなは、なをことにしてわれありと、かたみにぞしるかみのうけひて。

孟子曰。無恒産。而有恒心者。惟士爲能。若民則無恒産。因

無恒心。苟無恒心。放辟邪侈。

無不爲己。及陷於罪。然後從而

刑之。是罔民也。

フハツチ、ヒトヲトフハ、ヒトヲコロスヤウナモノニナル。

マツリゴトホリニナル。

マツリゴトとは國家の中心から外部に向つて油を供給することである。

其の供給された油を運用して外部から中心に還して行くのが祭である。

それで、マツリゴトとマツリとは内と外と、上と下と、本と末と、枝葉と根幹とが相互に交流疎通する行事なので、相互に表裏をなしつつ國家を治め、天下を和ぐる妙用を現するのである。

油とは比喩である。

猶太人が膏注ぎたるものと云へる如く、油とは神の稜威である。

それ故に又、水とも云ひ、火とも云ひ、靈とも呼び、無とも称するので、極で、無極で、極大で、極小で、物で、純男で、罔象女で、佛で、恵保婆で、閻魔天で、必竟、空なる實在である。

其の實在は裏から觀れば無宇

宙で、表から觀れば體で、表の表から觀れば大宇宙で、裏の裏から觀れば點で、裏の表から觀れば零で、表の裏から觀れば直日で、表と裏とを合せて觀れば二で、経で、○で、○で、三で、身で、一で、○で、火経身で、日止で、人で、人間世界にほかならぬのである。

火人（ひと）と日止（ひと）と人間世界との關係を簡単に説明すれば如上である。

そのそのの、ここるところにそのさまの、うつるをみればかみながらなる。

以上 昭和十四年五月十五日

山谷 謙

觀門の見方

ミイツ
サキリ

空なる實在[?] (神の稜威の二とで、極、無極、極大極小と表現)

裏 ↓ 無宇宙

とは

表 ↓ 筒體

表の表 ↓ 大宇宙

裏の裏 ↓ 點

裏の表 ↓ 零令

表の裏 ↓ 直日

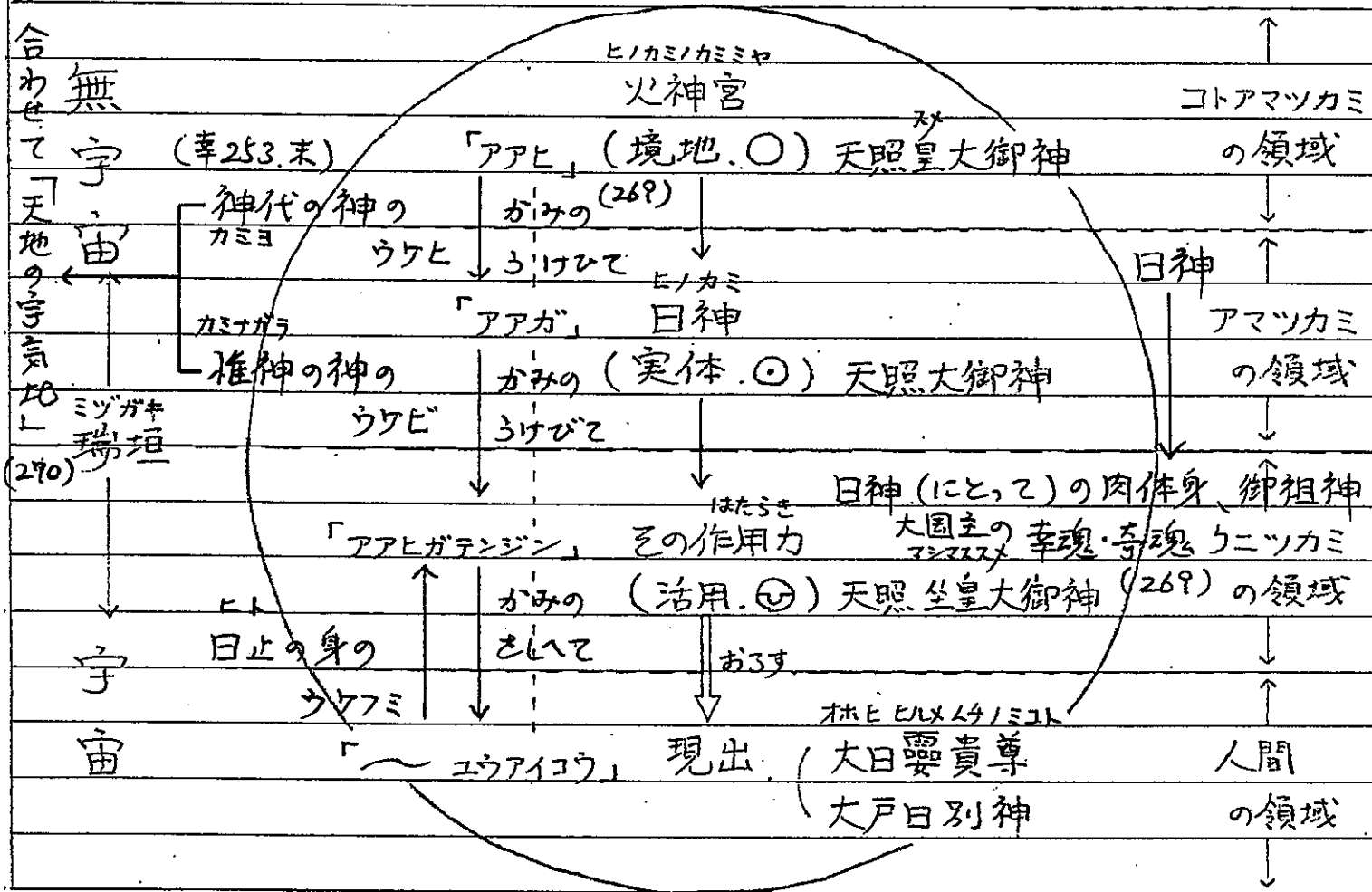
表と裏と合わせると ↓ 二 ↓ 經 ↓ ◎ ↓ ◎ ↓ 三 ↓ 身 ↓ 一 ↓ ◎ ↓

火經身 ↓ 日止 ↓ 完全圓成の宇宙である筒體である

2019.12.17.

十四字秘言と大宇宙概念図

(あくまでも「理解の便宜」としての概念図である。実際には、
 日神の作用力は、最初から宇宙の隅々にまで行き渡っている。
 ヒノカミ はずさき



カルコト能ハズ。サレバ「はるひひめはるひひめはるひ
ひめ」^レ「ああひがてんどんんゆうあいこう」^レト回
本人普通ノ発音ヲ稱ヘマツレバ何時何處ニテモ宜シ
ク行住坐臥ニ拘ハラズ。

カミノコトタマ

數理ハ本來數ニハ無之ク計算ニアラサルヤレバ神言靈
ヲ稱ヘマツルハ唯一回ニテモ百千萬遍ニテモ回数ノ爲ニ特
別ナル結果ヲ生ズルハ無之キナリ。悟ルモノハ一音響
裡ニ任レ迷フ時ハ十言萬語ノ裡ニ苦レム。開悟ト迷
蒙トヲ譬言ヘテ日月ナリト古老ハ教ヘ來リレモノ支
那人ハ之レヲ易ト傳ヘ生死遷流シツツ生死遷流無キ

ノ太極ナリ



ある。

その伝へは幸にして古事記や日本書紀などに委しいから、人人は須らく熟読究明すべきである。

第七章 終

第八章 少彦の協力

「一にして二にして三にして四にして五にして六にして七にして八にして九なれば十と呼ぶ」とは「宇宙は統一躰なり」との義で、数を以つてそれを説明したのである。それだから、之れを数理観で宇宙観で、また、人身観だと云ふのである。

此の数の活用が神界をも、魔界をも現出するので、「鎮魂祭の糸結び」が行はれる。

魂の緒を結び結びて人は皆神とこそ成れ。日月隔てず。

日に夜にも結び留めたる君が魂。八代九重に仰ぎこそすれ。

高魂の神の御子に暴悪で何うにも教へやうの無い神が在られた。大穴牟遲神はそれを良く養ひ育てたために出雲国を完成して大国主神と成られた。

暴悪なものを制御しようとするれば、それにも増した暴悪な力を持たねばならぬ。その暴悪な力を醸して神業に随順する。

それは、「神と成りたる魔」であることを屢々繰返して述べたが、そのやうな神魔の協力に依つて人天万類を

毒を毒にする事、所謂「毒を以て毒を毒する」の事もなく、「毒を交じて薬と為す」ものがある。それならば、どうして「毒が薬に変わる」だらうか。

それには、二つの道がある。その一つは、毒を毒のまま分量と時間と空間とに適応させる。然うすれば、毒も薬の役を為る。是れは所謂政治家と呼ばれるものの慣用手段である。他の一つは、それとまるで趣を別にしてゐる。

それは、神音と神象と神数との活用に依つて醜を美に悪を善に邪を正に轉換させるので、用ゐるか使ひ場所とか使用の時とかに關はるのではない。「神音を稱へ神象を画き神数を算む」。すると、禍津毘と稱ふところの醜悪邪曲が極底最下の火と化して根堅洲国を築成する。

そのさまを「大祓の祝詞」が僅ながらも伝へてある。その中の文章の一部と行事中に稱へる秘詞とは神音であり、行事中に画するは神象であり、齋部の算むは神数である。さうしてその全部が行はれば、瀨織津比咩・遠開都比咩・氣吹戸主・遠佐須良比咩の神座が成立する。それは則、日若宮で、日隅宮で、◎である。

かしこしや。此れ是の極底最下の一線は、即是れ極大無限の一線。線にあらず面にあらず点にあらずるの点線面なればとて之を画いて「ヒ」となし之れを算んで「イ」となし之れを詠ふて「ム」となす。

神界構成妖魔群。昨是今非術魂城。出沒浮沈三惡道。願望一夕冢間煙。

立ちのぼる煙の糸の結び来て立ち舞ふ姿神ながらかも。

天地の神の心を畏みて人の世何時も浦安くこそ。

みたまをまつるのりと

ひもかたな さひもちかみの ゆきかえる

潮路はろはる 月はすみたり

チチハハ ミオヤ ミオヤ ナベテノヒトビト

ワガサキノヨノ チチハハ ミオヤ ミオヤ

ワレニユカリアル ナベテノミタマ ミミタマ

ミナトモニ サトリ サトル サトリサトレバ

アマネク ミスマルミタマノカミ ナルナリ

アマネク ヒトツナリ

ヒフミヨイムナヤココノタリヤモモチチミテリ

ト タタヘマツルナリ

カミ トコソハ タタヘマツルナリ

ちちははの かたみの わが身 わが心

きよくたたく よをばわたらむ

正誠正義神国築成

ああひがてんじんゆうあいこう

アチメ アチメ アチメ

アスバカスヤゾ サカラカスヤゾ

オーオーオーオーオー

オーオーオーオーオー

燃ゆる火の 燃ゆるともなく 行く水の

行くとも知らに 五何新可木

めぐりゆく イツカシガモト 神ながら

ゆきかへれとぞ 日月かがやく

ヤマトニハ ヒトサハニヨリ クニツチモ

ミナヒカリタル イツカシガモト

ミタマシロ キズキテスメバ アメツチハ

ヒカリミチタリ ホガラホガラト

氏の神 みまもるやどに ももちたり

みおやの神の 神輪輝く

引く汐の 潮の任運 引くからに

また満ち満ちて 月圓なり

往く日止の ゆくえしれらば かにかくに

とく帰りませ 五何新可木

白玉の 真玉 玉 まつぶさに

統一る御魂 天なるや

御中の神と 神治らすまに

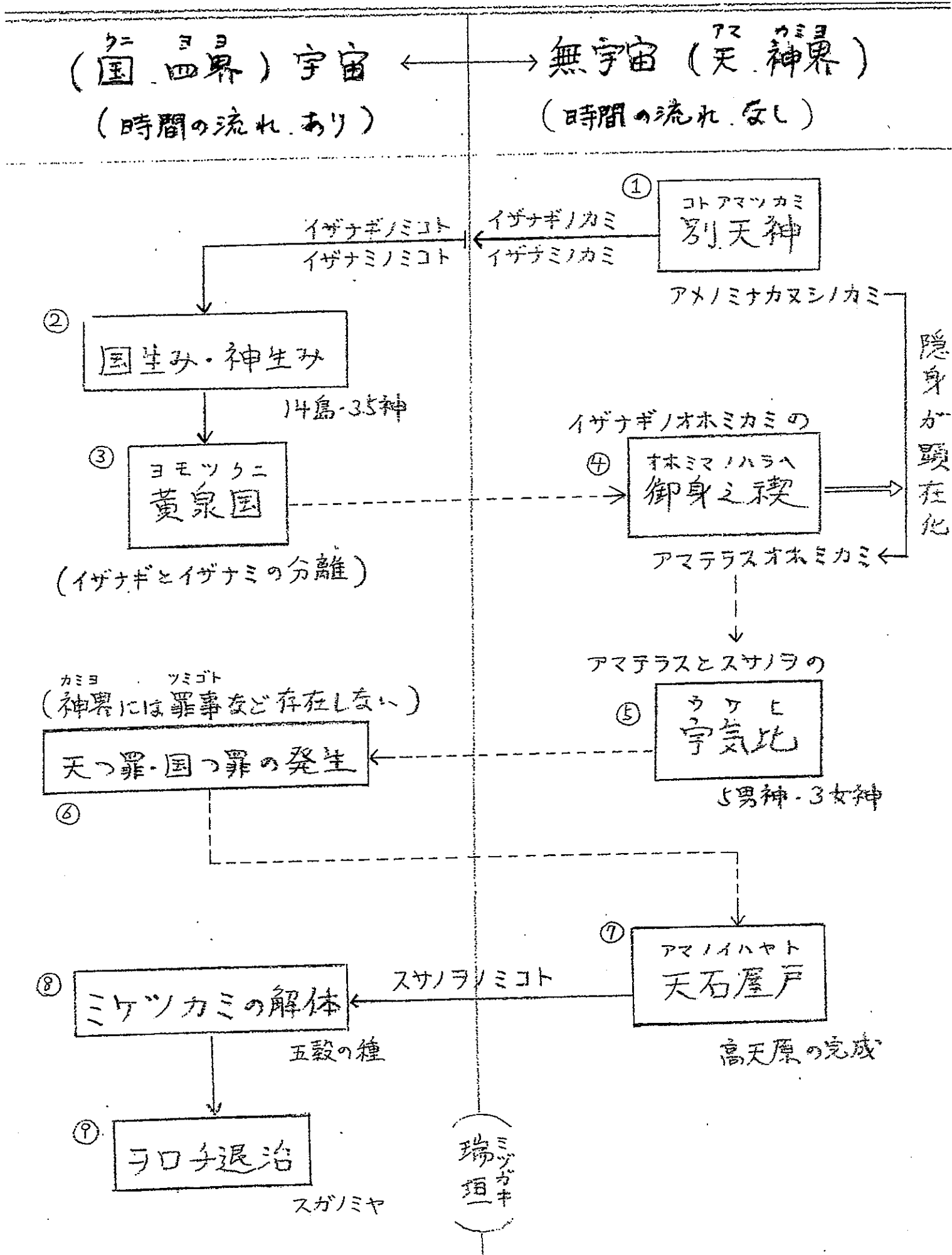
アアヒガテンジンユウアイコウ イウヲエヤ

ヤアベ

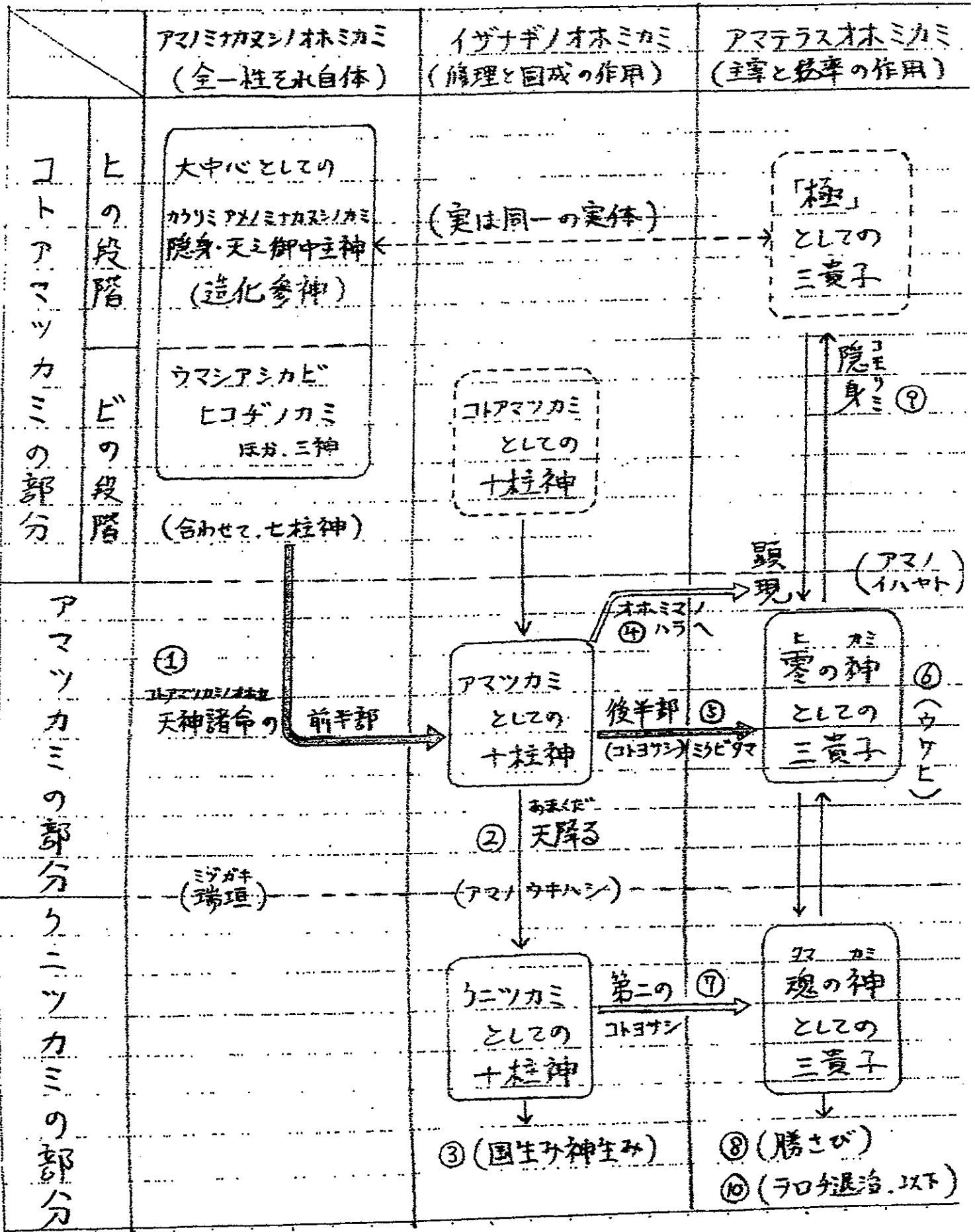
イーイーイーイー

ウウウウウウ ト ウト ウ

図表：古事記の神話の前半部の構成



図表：大御神と天神諸命



古事記は、その劈頭に、「高御産巢日神・神産巢日神」と稱へてあるが、之は神代の神の御上で、人間身の出生を教へたのではないから、「日」の字を用ゐ、日本紀の「高皇産靈尊・神皇産靈尊」と記して、「靈」の字を用ゐたのと同じやうに、「ヒ」の神の御事と拜するのである。

ひのかみの、かみわざなりて、ながむれば。あめつちは、いまや、みすまる。あめつちは、いまぞ、わかる。はるひひめ、しらすはるのは、かみのはな、いまさかりなり、おほひひるめのひたかのみのかみに。

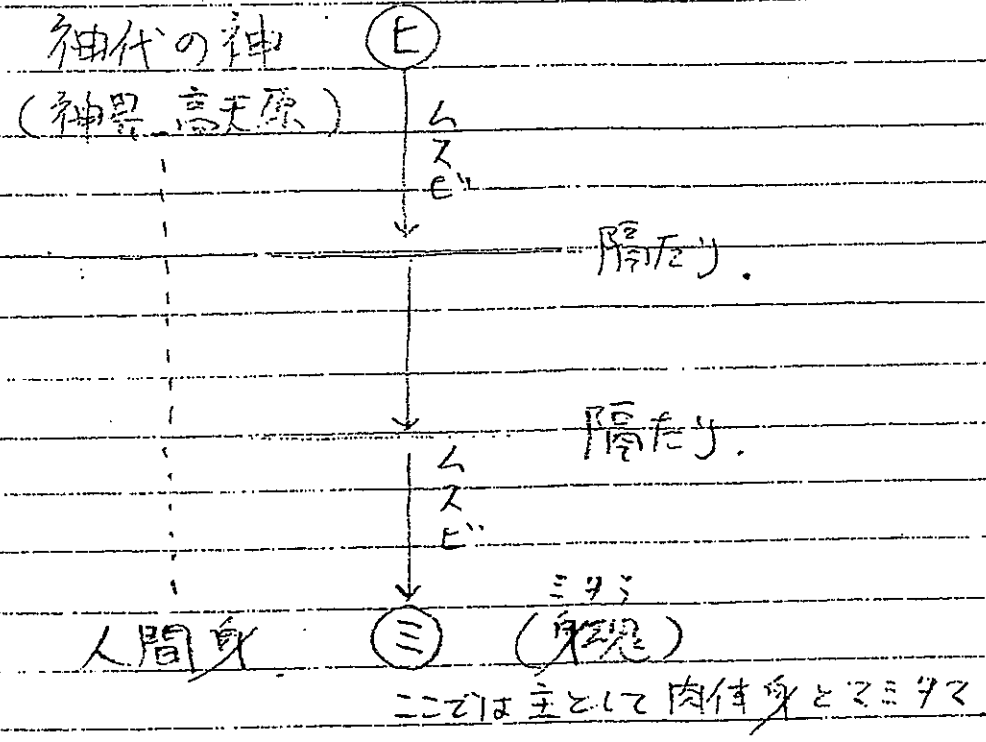
その國は「日」の國で、その神は「日」の神で、人間身の未成らざる神界の事理である。さうして、清陽と重濁と、或は、精粗と、厚薄と、様々の異別は有るが、眞理は一貫して變らず、事實は眞理を離れるわけが無いから、人間身も、神代の事理をそのままに、「ムスビ」「ムスビ」し「ミ」である。唯、その神界を出でて幾度轉。神代を去ること幾時空。そこに隔りが出来たのである。隔りを我と我が身に築いたのである。

もしも、其の隔つるものを取り去るならば、この身此のまま、神代の神に連るので、生死一貫、顯幽一途。日神の^ミの^ヒ指し透るのである。その上で拜みまつれば、産土神とは、神産巢日神祖命にてましまし、鎮守神とは、高御産巢日高木神にてまします。

天なるや、天の返し矢、天離る、夷女の子が、神ながら、氷目矢を受けて。神守る。眞賢木立てて。高知るや、天つ國玉。高彈くや、天の詔琴。人の身を、神とはすべく、人皆を、日止と成すべく、大虚空、焚き

2018.9.3. (水)

幸260



隔たりと取りかて考えれば、人間身もまたヒカミに直結している (生死一貫 顕幽一途)

逆に言えば、^{ヒカミ}日神(中心)の^{ミツ}心のミツカリが「今ここ」にましまると、「今ここ」もまた高天原の一部であると解るようになる。

→ さらにいえば、産土神が神産巢日神のウツシオミで、鎮守神が高御産巢日神のウツシオミであると解るようになる。

古事記の記載は、一見まことに複雑ではあるが、

第一章は、別天神の神界記であるから、之を數理觀から言へば、最初に一を教へ、その一は、三から成り立つて居り、その三は、經と緯との二であるからとて、時間と空間とを現し來る本體としての零を知らしめたのである。

第二章は、宇宙成壞の垂示であるから、時間と空間との二つが一つになつては十で、その十が別れては、破壊と呼ぶところの死で、その死も結び來れば、建設と呼ぶところの生で、成で、此のやうな變化は、二、三、四、五、六、七、八、九と稱するので、その成り餘れる三、五、七、九の四と、成り合はざる、二、四、六、八の四との合ひては、八である。此の八に依つて、宇宙の萬有は制御せられ整理せられて平衡を保つことが出来るのである。

第三章は、高天原築成の祕儀である。之をミソギと呼んで、三十神界の生滅起伏である。

第四章は、罪惡觀で、數の分散である。

第五章は、高天原開闢記で、三十六の聚散離合である。

第六章は、罪惡觀の第二で、復活の垂示である。五の百倍と、百の百倍と、千の千倍との九である。と云ふと、ひどく普通學には遠ざかるが、神界の事理が複雑なのであるから、祖神垂示の數理觀は懇切丁寧であつても、之を理解することは、まことに容易ではない。で、以下之を省略することとしよう。

第七章は、中心觀で、箇體成立の原理に立脚して、國家觀を教へ、特に日本建國の精神を明にされたのである。

第八章は、綿津見宮と日少宮、産土神と鎮守神との關係を説示したのであり、

第九章は、死生解脱の祕を教へ、

第十章は、宇斗の神言靈を垂示されたのである。此の神言靈は、一言の萬城主の主るところで、古事記は之を下つ巻に記されたが、事實は勿論神代紀である。

神の代の、神の祕事。人の身の伏し仰ぎつつ。今日もかも、國平けく。明日もかも、うら安くこそ。内外隔てず。

靜寧和平の神國樂園を築くには、唯是、爾が身を爾自、倭の青垣東の山の上に齋き祭ればよいのである。

産土神の神徳は、ミタラキそのまゝ「ハハ」と成り鎮守神の神徳は、そのまゝ「チチ」となる。合せては「ミオヤ」と呼ぶ。爾^ナが身は、固より「チチ」と「ハハ」との一つ身なれば、「ミオヤ」である。

ちち、はは、みおや、みおや。なべてのひとびと。わが、さきのよの、ちち、はは、みおや、みおや、われに、ゆかりある、なべての、みみたま。みな、ともに、さとり、さとる。さとり、さとれば、あまねく、ひとつなり。ああひがてんじんゆうあいこう。と、たたへまつるなり。

日本の古典は、之を傳へて、

大正人道教主人

多田山山公日秘稿

大正人道教主人とは直日にし、國家にありては國主なり、國なり、國言なりにてましますなば、家庭に於ける戸主なるべし、組合に於ては組合長にして、社にありては社長なり、會長に於ては、世界人類としては、迦なり、基督なり、天照大御なり、天帝なりにてまします。其の故は、生死遷流しつつ生遷流を知らざるが故にして、命なり、美画止(みこと)なれにして大宇大宙のその相(すた)なり、その事理なるなり。然れども、人の身は箇體として限られたる世界に生活するが故に、其の身の来由を知らず、一語を辨せずして、箇體に執着し、見聞し得る範圍に於て目的を定めんとするなり。於此か、所謂、偶像を目標と

せざれば確實感を得難くして、人為の對照體を求めて初めて安心立命を得たりとなすなり。佛像佛画の本尊と稱し、神像神體と稱するものと共に、天皇と稱するも亦然るなり。

大正人道教主人とは神直日なり。而して、靈にして、魂にして三にして、二にして、一にして日にして、月にして、日月にして、四象にして、兩儀にして、大極にして、無極にして、極無極にして、如是なり。

メにして、ヒにして、フにして、ヒメにして、ヒコにして、ハルヒヒメにして、三三三にして十種にして、三三三にして、一三三三五六七八九十百千言にして零なり。

之れを人天萬類の差違となすなり。否、差違なりと知るなり。ヒフミヨイムナヤコニノタリヤモモチチミテリ。二十一秘言

アアヒガテンジンユウアイコウ。

十年依然裙下蒙
三日忽然高峰樓
さくらばなさきのさかりを
まきとめよにさちあれとあさつとめする。

寫經一巻
朝陽函一幅
ちちははみおやみおやみなともたさとりさとする。さとりさあればあまねくひとつなり。

あすはかすやぞ。さからかすやぞ。
おとおおおおおおおおお。
ああひがてんじんゆうあいこ

今日今時人不來
風塵掩空日光不明
虛名徒壽於世間
三年不鳴鵬雛情。
つるのこのそのひとこゑはそらたかくけふほがらかにびびきわたれり。

◇

山の井の笕の垂水今日解けて
蕨萌えたり陽炎のして。
昭和十二年四月八日 木曜日
晴 後に薄曇。
昨夜東海漁翁之孺子来云。
我是第三神界主神之女也。
今日以後願侍於後宮。

紫の縁由たづねて人ぞ尋る今日をば八日と神の治らして。
ああひがてんじんゆうあいこ
よし。

まさかきはいちうつくしくなつやまのしじにしげればよしとこそそのれ。
ああひがてんじんゆうあいこ
はるひひめはるひひめはるひひめ。

ああひがてんじんゆうあいこ
あさもよし。きのべのみやとかみのうけひて。かみのうけひて。かみのをしへて。かみしらすまに。
あさまやま。

ひここそあまひ。

二十一秘言とシタマワリノノリトを解入ることをいふより、大宇宙の相を知り大宇宙の
大中心としての個體となる。

千千ハハミオヤミオヤのノリトの説明

固の支那文字を見よ。

□古にして□□十にして⊕にして凝固の形象なり。

而して結實なり、結晶なり。産靈にして産魂にして魂にして、結び止めたるなり。

十なる□の蒐集したる□なる固なると共に、□に宿りたる古にして、根本魂と外郭身との團

結體を指事したるなり。之れを兒なり子なり孩なりと

ばす。兒は兒なる人の宿るところにして官なり。

子はかがまりたる人なり。他に依據するものなり。

孩は子女の未自立し得ざるものにして、唯其の核在るのみなり。

りとの義なり。

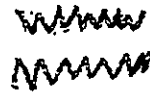
常陸國に小田と北條との二村有り。

鎌倉時代より今に至るまで相闘ぎ相争ふて止まず。

北條の水を小田に分たず。小田、之れが爲に耕耘にたへず。

仇敵境界を接するを亥と云ふ

孩の図



之れをハハと云ふ。

母胎に住み母血を吸ひ母乳を呑み、母を食料として生活せるもの即、孩なり。

而して母は之れを言ひ、之れを愛撫し、之れを養育す。これをマンコと云ふ。

七の妙用なり。

カミヨは七にして五にして八にして百にして千にして萬にして一二三四五六七八九十百千萬にして零なり。

之れを千千ハハと呼び、ミオヤとも、オヤとも稱へまつりてアメツチノカミワなる資料なり財貨なり。

あちめあちめあちめあちめあちめ。ああひがてんじんゆうあいこ

う。ちちははみおやみおやみなともにさとりさとる。さとりさとればあまねくひとつなり。

あすばかすやぞ。さからかすやぞ。おおおおおおおお。ああひがてんじんゆうあいこ

う。

上
零(一)に内在する原理として、一ニ三があるように、

空零(六)に内在する性質として、六七八があることを考える。

○とが二重相としては①である分故に、

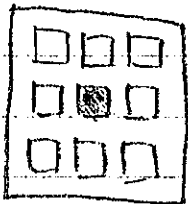
それは②となり、「零の自己組織化」が可能となる。

同様に、空零もまた状況次第では陰陽不測のメとなる。

母としてのメと子としてのメの離合集散によって、また

筒体が生じる。これが $\begin{matrix} \text{www} \\ \text{www} \end{matrix}$ と描く「土の妙用」である。

(九)



(九→十)

九は中心(一)と外部(八)

これを一つにまとめて十とする。

る。之れを、

人の世では「聖」と呼ぶ。則、「カミ」である、我の内に拝む神であると共に、内外不二に拝みまつる「天皇」にてまします。

カミノイノチハハテモナシ
聖 寿 無 窮。

之れは単なる讚へ辞でも祝ひ詞でも希望の詞と云ふのみでもない。まことに宇宙の事実で真理なのである。太古以来、その聖なる人類は此の事実を明らめ得て、此の真理の上に国を建てたので、それは「神聖国躰」であつた。

その国は穢れ無ければとて「土」と書き「穢土」と區別したのは注意深き支那文字の成立である。形に書けば○である。或は□とも描く。之れを日本語ではアマと呼ぶ。空なのである。「天」であり、「海」であり、「女」である。

「ア」は発ぎ発いて、果て無く限りの無いのであり、「マ」は円満具足であるから、「アマ」とは大宇宙の義で、都べてのものの産出者で、祖である。則、母胎で空界で零境である。之れを「イへ」と呼ぶ。

此の○には不断起滅の火が有る。その火の燃ゆるを見て、○の中に一点を点ず。則、○である。「いへのあるじ」で「光」である。「不断起滅の火」であるから即「一点不滅の火」である。

一点不滅の火は、則、無尽無量の水で、それがそのまま無際無涯の身であり、身も無く境地も無い心である。それは身でもなく水でもなく火でもなく心でもないところの○であるからとて、古老は、

ヒフミヨイムナヤコト
一二三四五六七八九十と称へて、円満具足の箇躰だと讚美したのである。

行人去来(三)

多田山公遺稿

テチハハ ミオヤ ミオヤ
 ナベテノヒトヒト ワガサキノ
 ヨノ チチハハ ミオヤ ミオ
 ヤ ワレニユカリアルナベテノ
 ミタマ ミナトモニサトリサト
 ル サトリサトレバ アマネク
 ヒトツナリ アアヒガテンジン
 ニウアイコウトタタハマツルナ
 リ。

それで此の大神文は生死を運
 じ自他の身魂を伊都伎まつるも
 のである。

アアヒガテンジンユウアイコ
 ウ。

アアヒガテンジンユウアイコ
 ウ。

日本古史に三貴子と傳へたる
 は、伊邪那岐大御神の御身之禊
 (おほみまのはらへ)に依つて
 其の神徳を明にせられ、大日靈
 貴尊(おほひひるめむちのみこ
 と)の御名は三貴子の御継紹を
 人間身の位置より仰ぎてたたへ
 まつれるなり。

而して更に、大戸日別神(お
 ほとひわけのかみ)と称へまつ
 るは、晃耀赫灼一圓光裡の波瀾
 曲折たる上よりの御称号にして
 共に、春日比咩(ひるひひめ
 のかみ)にてまします也矣。

故に、
 アアヒガテンジン
 天照大御神天照皇大御神天照坐
 皇大御神大日靈貴尊大戸日別神

と記しまつるべきか。
 アアヒガテンジンユウアイコ
 ウ。

アは開き、ウは圍づるので、
 今仮に此の十四音にて一圖を描

「はるひひめのかみ」は全てのハルヒヒメを
 統率するところの神のことなので、
 即ち天照大御神と同義である。

かんか。
 (ここに図が入りますが略し
 ます)とも成るべし。
 嘗て鷲宮祓禊所に在りて、左
 の一語を書く。

山裡清明

蓋、是の大神文の神相(みす
 がた)か。
 今年三月三日 敬虔拜書

二月十四日 此の地方として
 はまことに稀なる大風雪。
 爲に、祖父が記念の蜜柑。根
 本より折れて七十餘年の命数終
 る。

感懐無量、此の文を草す。
 噫。

ちちははのかたみのわが身わ
 が心きよくただしくよをばわた
 らむ。
 ああひがてんじんゆうあいこ
 う。

寄る年の波をたたみて故郷の
 道遥なる旅をしぞ思ふ。

鏡泊湖上白雪體體。

虎狼遠近半月凍結。

孤舟失糧三客拱手。

三千年來未聞之非。
 山の温泉の夕術無み前の世の
 運命のままに人の逝くなる。
 海原を照らして今日も少名比
 古加賀美の舟の往き返るなる。
 生死遷流必竟如是也矣。

一ニ三四五六七八九十百千萬

2. アアガ
実体

アマテラスオホミカミ
天照大御神

1. アアヒ
境地

アマテラスオホミカミ
天照皇大御神

3. アアヒガニシ
作用力

アマテラシマシマヌオホミカミ
天照坐皇大御神

4. シユウアイコウ
人間世界
このフをかり

オホトヒワケノカミ
大戸有別神

オホヒヒルメムチノミコト
大日靈貴尊

このためには、

「拜神瞑目して光を認むるは神命にして、其の位置と数と明と暗と滅と色彩と形状等とは、直に其の説明を與へたまへるものなり。」

①座を回りにて多数の一あるを認めたるものは、赫々の火にして聖無動尊の加護顕著なるを示し、②高く一点の火を拜するものは、光明世界に住することを

教へ、③日ならざる一箇の火は八握劍にして、④全身零に坐する時は白玉身を悟證し得たる曉なり。

アアヒガテンジンユウアイコウとは稱へまつるなり。

奉称すること

必要である。

アチメアチメオオオオオオオオオオオオ

アチメオオオオオ

アアヒガテカジンユウアイコウ

ウトノミヤシロ

ウトノカミミヤ

ウトノミヤ

ウト

ウ

ア

ハ

ヒ

フ

ク

フルベユラユラトヲフルベ

ユツツマグシ

ウ

ヤシマジヌミ

イウヲ

ウ。ウ。ウ。ウ。ト。ウ

ト。ウ

ウ。ク。ヒ。アチメ。ヨシ。ヒフハ。

心して我は行かなん朝夕に神の心を心とはして。置く露を掃ひては行け朝毎に道の長途の長き旅路ぞ。

ウ。アアヒガテンジンユウアイコフハヒフヘホ。

一四此言りりト

と稱す

秘徳の説明

状況

→

その意味内容

拜神瞑目して光を認める。

何らかの神命である。

① 座を回^{めぐ}りて多数の一^{ひと}が
あるように見える時は

聖無動尊の加護が顕著
であることを示している。

② 高く一^{ひと}点の火を拜している
ように見える時は

(その人の意識が、今までに)
光明世界にあることを教めている。

③ 日^ひなるぎ^と一閃の火が
見える時は

入握剣の作用力が
(今ここに来ていることを示し)

④ 全身が零^との中に座している
ように感じる時は

白玉身(直日)と悟證した
暁であることを示している。

おおよく、順序は①→②→③→④の順であり

この④直日^{ナホヒ}の悟證に至るためのコトワカが、十四字秘言である。

同じ十四字をさらに唱え続けることで

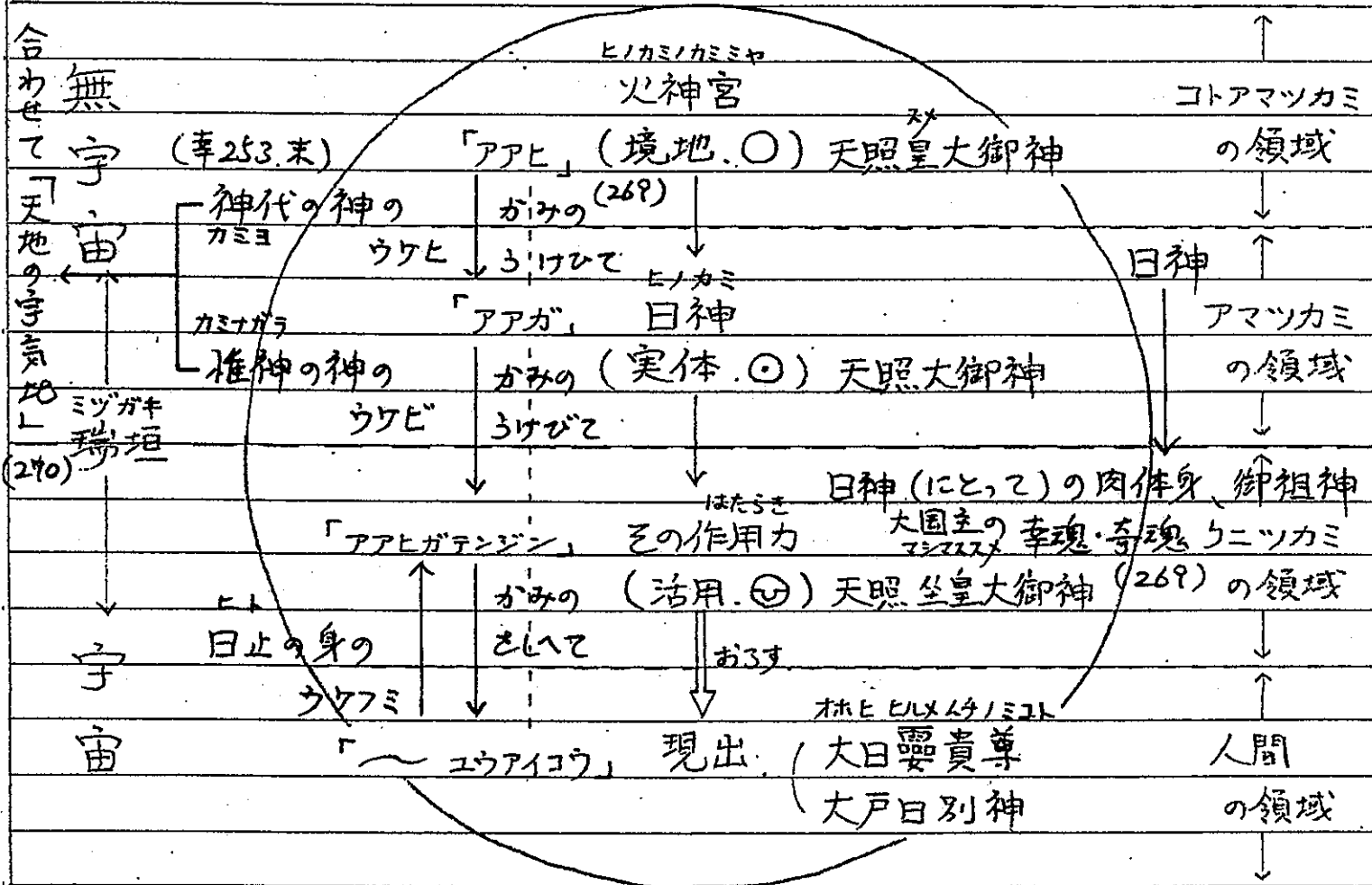
直日^{ナホヒ}の作用力は全身魂^{はたしこ}に行き^{ミマス}癒し

その人は「この身^{こゝろ}このまま神と化^なる」のである。

2019.12.17.

十四字秘言と大宇宙概念図

(あくまでも「理解の便宜」としての概念図である。実際には、
 日神の作用力は、最初から宇宙の隅々にまで行き渡っている。
 ヒノカミ 伊弉諾)



葦原醜男、八千戈神、大國玉神、鬮國玉神、大物主神の七名を挙げてゐる。
四 下には「庶兄弟」とあるから異母兄弟である。

三 大勢の神々。

二 大勢の神々は皆、葦原中国をば。

一 自ら退いて譲った。

六 因幡の国。

五 和名抄に因幡国八上(夜加美)郡がある。この地に因んだ名であろう。

四 旅の用具を入れた袋をかつがせ。当時袋をかつぐのは賤しい者の仕事であった。

三 連れて行った。

二 因幡国気多郡の海辺の崎。

一 素っ裸の鬼。着物も何にも着ていない丸裸の鬼の意。

四 お前がすることは。

三 海潮、即ち海水。

二 山の高い所。いただき。

一 海水。

六 皮膚。

五 輝かれた。皮膚が裂かれた。風に吹かれたために皮膚に亀裂(ひび)が出来たのである。

四 隠岐の国の意か単に沖の島の意か未詳。

三 この気多の崎。

二 つて。でだて。

一 鰐、海蛇、鰐鮫などの諸説があるが、海のワニとあることと、出雲や隠岐島の方言に鱧や鮫をワニと言っていることを考え合せて、鮫と解するのが穏やかであろう。

四 僕と君と競って、どちらの同族が多いか少いかを数えよう。

大國主神

1 稻羽の素鬼

花神。夜禮の二字は。此の神、天之都度閑知泥上神。都より下の五字を娶して生める子は、

遊美豆奴神。此の神の名は。此の神、布怒豆怒神。此の神の名は。の女、名は布帝耳上神。布帝

字は音を以るよ。を娶して生める子は、天之冬衣神。此の神、刺國大上神の女、名は刺國

若比賣を娶して生める子は、大國主神。亦の名は大穴牟遲神。牟遲の二字は。と謂ひ、

亦の名は葦原色許男神。色許の二字は。と謂ひ、亦の名は八千矛神と謂ひ、亦の名は

宇都志國玉神。宇都志の三字。と謂ひ、并せて五つの名有り。

故、此の大國主神の兄弟、八十神坐しき。然れども皆國は大國主神に避りき。

避りし所以は、其の八十神、各稻羽の八上比賣を婚はむの心有りて、共に稻

羽に行きし時、大穴牟遲神に帛を負せ、從者と爲て率て往きき。是に氣多の前

に到りし時、裸の菟伏せりき。爾に八十神、其の菟に謂ひしく、「汝爲むは、

此の海鹽を浴み、風の吹くに當りて、高山の尾の上に伏せれ。」といひき。故、

其の菟、八十神の教に従ひて伏しき。爾に其の鹽乾く隨に、其の身の皮悉に

風に吹き拆かえき。故、痛み苦しみて泣き伏せれば、最後に來りし大穴牟遲神

其の菟を見て、「何由も汝は泣き伏せる。」と言ひしに、菟答へ言ひしく、「僕

淤岐の島に在りて、此の地に度らむとすれども、度らむ因無かりき。故、海の

和邇。此の二字は音を以る。を欺きて言ひしく、「吾と汝と競べて、族の多き少きを計

火神

多田山公台遺稿

死者を齋ると云ふことは、分裂し分散し行く身魂をして、速に其の極に達せしむるの義であるから、之れを「ヒノカミノカミワザ」とも「ヒノカミワザ」とも「ヒノカミカカリ」とも、「スリカタメナスナルアマノヌホコノカミカカリ」とも「ヒ」とも称するので、物で云へば燃ゆる火で、光る目で、極端なる氷で、究極の靈（ひ）で、根本の魂（ひ）で、解脱の零（ひ）で、最大最小の一で、統治統率の◎◇田+ +であるから、極大で、極小で、窮数で、満数で「ヒ」だと教へられたので、其の色を云へば緋で、その相を云へば一圓相（ひかり）で、其の響を云へば一音響で、人の聴き得ざるおとたなばた人知らぬ遠邇で、本打切り末打断ちたる天

津金木で、始終の無き始終で、非で、否で、非否で、靈（ひ）で、魂（び）で、産靈（むすび）で、産魂（むすび）で、高皇産靈で、神皇産靈で、生魂で、足魂で、玉留魂で、高魂で、神魂で、生玉で、足玉で、玉留玉で、道反玉で、死反玉である。

「イナボ」と云ふのである。
日本書紀一書曰。

又勅曰。以吾高天原所御齋

庭之穗。亦當御於吾兒。」

「齋庭之穗」とは「マツリノ

二ハ」の「イナボ」であるから極大極小の零（ひ）を結び結びて宇宙を築き、宇宙を統治すべきなりとの義である。

齋庭（ゆには）とは「ミタママツリ」で「齋」である。

之れを「メノカミワザ」とも「ヒメカミワザ」とも称するので、「イナシコメシコメキ」で醜女で、醜の又醜の醜の極であ

る大醜で、大美なのである。
「亦當御於吾兒」とは、大直日の如く、直日の徳を明にすべしとの義である。

齋庭祕言一圓相。
皇子皇孫一音響。
眼耳鼻舌一空零。
隨縁起滅一天命。

ひふみよいむなやこのたりやももちちみてり。
あちめ あうを。
う。う。う。う。う。と。う。

「稲羽素菟」とは、「イナバ」なる正しき資料にして、「シロウサギ」とは「ウサギ」にして極小の結びたる身なりとの義なるなり。

極小の結びたる身なりとは、「ウト」にして神聖なり。
之れを「カミナガラ」とたたへて「カム」なり。

「カミノマニ」にして神人なり。


以上

昭和十一年七月十四日夜半

「ヒ」の意味とその表現について

零^ヒ—— 時空や万物を構成する根本資料としての「實在」そのものを指す名称。

日^ヒ—— その「實在」が「中心」として機能している際の名称。「統一^ヒ体」全体を指す場合もある。

↓極、唯一点、種子^{タネ}、、光^{ヒカリ}、日神^{ヒノカミ}とも。

火^ヒ—— その「實在」が単なる「資料」としてしか機能していない状態の名称。

「中心」に付随してその「外郭」を構成するか、さもなければ遊離^{メザン}して「魔」となる。

イナボー「種子」と同義。極大極小の零(ヒ)のことを「種子」とも言い、「斎庭之穂」(マツリノニハのイナボー正しき資料のこと)。

イナボ(とも表現する)。

万物は「中心」より出でて「中心」に帰る。その「中心」を「ヒ」と呼ぶが、同時に、その出たり帰つたりする際の「一貫しての筋道」をも「ヒ」と称する。

人間にこの「ヒ」を教えるが、振魂尊(ニニギハヤヒ)の御神徳である。

^{ヒカミ}
(E) 日神 (極、極大極小、ウ)

無宇宙

(ヒカリ) ^{ヒカヒ} 直日 (日神の神輿) = ^{カミ} 神
(最大最小)

宇宙

(極小の結びたる身、ウト)
^{ヒカヒ} 直日の (そのまま) ^ヒ 人 = ^{カミ} 神人 (名詞)

→ これは「神律に正しく^{ヒカ}随った人」とも

表現できるので、修飾語としては、

その「神律に随ってこれを^{ヒカ}子^{ヒカ}様」と

指して、^{カミ}神へ、^{ヒカ}と^{ヒカ}言ふ。(未23頁)

(ウト、神聖、神人、カミ、はほぼ同義語)

「イヘ」と「ハカ」
その一

「コトタマ」としての本義

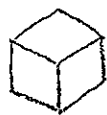
アマ ----- 大宇宙、万物の産出者（祖、母胎）^{オヤ}



（未来、197頁ほか参照）

→ 神名としては、^{オホミカミ} 大御神、^{ミオヤノカミ} 御祖神、など。

オホミソラ ----- 六面晃耀の^{ヒラミ} 零海、^{カミ} 神聖の^{アレ} 生ます^{トコロ} 胎。



（未来読台本、325頁、参照）

→ 結果として「アマ」と同義。

イヘ ----- （人間がそこから）^{ヤド} 発展上昇すべき胎。



（同、326頁、参照）

→ 等しく「母胎」であるが故に、究極的には「アマ」と同義になる。（未来、197頁、参照）

ハカ ----- 光り輝く^{ミタマ} 魂。（おまび、^あ その^か 在り処）



（未来読台本、335頁、参照）

→ 日常語としては「人間死後の家」（同、332頁）

のことだが、これもまた究極的には

「生死を超越したるイヘ」のことであり、

「顕界神域と幽界魔境との一致点」であり、

結果として「全宇宙」と同義になる。

（同、335頁、参照）

此の「華の神」は蓋、全宇宙神の御意志であるから、人類世界にありて、此の「カミ」のままなる聖者が国を建てては、「全人類主宰の大天皇」と称へまつるので、その国は天皇国である。

全人類主宰の大天皇を中心と仰ぎまつる人類は、中古以後、各地の歴史が伝ふる如き、又或は、現在世界に見るが如き、隣邦を切り取りし、隣人より略奪して、自国自身のみ富饒強大を謀り、地球上を分割し占據するが如きものでないこと固よりである。

噫。

旧邦は既に廃れた。

人は皆、全力を捧げて、新邦の築成に励まねばならぬ。

その新邦の目標は、「天磐座」である。

「アマノイハクラ」と云ふのは、下も上も内も外も、スミスミテ スミキリタルもので、それは、






「山裡清明」である。

山裡清明の文は、仮借なること勿論で、外から見れば、ガヤガヤ ゴチャゴチャ と騒ぎ乱れてゐるものも、中は スミスミテ、静に穩に キレイ だとの義である。

「山」とは、水平面から凸出したので、顯著なので、支那人の象形文である。日本語では「ヤマ」と呼ぶ。


「ヤマ」の「ヤ」は、「八」であり「矢」であり、出でまた出づるものであり、「マ」は、円なので、身魂なのであるから、「ヤマ」とは、水平線上に突出隆起し、やがては、一箇独立体を築き成すもので、その極は「球」である。つまり、「小宇宙」で、経と緯とを有する筒体である。之れを客観すれば、現在私どもの見るが如く現

象世界である。が、その裡は澄徹玲瓏、一塵を止めざる零境である。それ故、「山裡清明一塵不起」とは、神界の形容である。

「大海平等一波不立」と云ふも同様で、同じ神界を別の面から形容したまでである。唯、前のは、大宇宙を  と描いて、成数としての五が、更に神業を完成すべく、一步を転じたので、「ム」で、六である。之れを六の零と呼ぶのは、此  () の如くで、未、その主を認めざる大虚空であるから、零海と呼ぶべき「〇」である。「山裡」も「大海」も、人間の平生見慣れた物に寄せて、人に話したので、共に清明澄徹の靈境で、その主を仰げば「カミ」である。  も  も共に空で零で、やがて、それは、家屋で宮殿で、オホミソラでオホウミで、数としての零で、人間的には「何も無いやうで」、さればとて、決して「無い」のではない。とでも云ふべきである。一塵不起、一波不立と云つて、一塵無しとも、一波無しとも云はぬのは、此の故である。実際に「無い」のではなくて、起らぬので、立たぬので、何時起るかも知れず、何時立つかも知れぬのである。全宇宙は悉皆、「神魔」の体であり、用であるから、裡と外と離れることはできず、別にはならぬこと固よりである。

「此ノ時迷フ経ニ処。形問フ影ニ何從」

此の「形を神と云ふべくんば、影を魔と云つても可い」。神魔雜糅なのは、逕に迷ふ処であり、明め得れば、神魔同凡に在るもので、魔もまた魔とは呼ぶべからず、神界築成の資料と成るのである。

「天と地と未割れず」とか、「天と地とを別け来し」とか、陰と陽とも分れず」とか、「独神」「一神」等と紀記などに、載せてあるのも皆、神魔同凡の「カミ」で、支那文字に  と作り、猶太の創世紀に、神は神の姿に似せて人を造つたが、その人とは、未「男と女と」別れぬ「独」だと伝へたなども、「カミ」と「ヒト」との関係



これで、思量の範圍に於ける一応の説明は出来たと云へる。
然り。

然れども、

這箇非思量底は奈何。

「・―〇」の教への逆の説明として

「〇・―」と表現し、顕界神域と幽界魔境の

相関關係を述べ、黄泉比良坂を説明している。

一致点で、分岐点、境界線

だとは、道反大神で、

塞坐黄泉戸大神で、

黄泉比良坂の一線で、

二柱御祖神が、相互

愛しき我が那勢命、愛しき我が那邇妹命」と愛でつつ、相逢ひ相別れたる〇で、

顕界神域と、幽界魔境と

分岐点であり、分岐点であり、境界線である。〇は、また直に「如是」全宇宙で、

である。

此の⊕を「ハカ」と呼んで、生死を超越したる「イへ」である。

「ハカ」の「ハ」は、「葉國」の「ハ」で、分れ出づる音義であり、その「カ」は、晃耀赫灼との音義だか

此の二音を合せては、光り輝く魂との義である。

かくて、幽界魔境もまた顕界神域に外ならず。此の故に、死者を齋ること、また、生者に仕へ、生者を齋
かくして、同殿惧床、日夜席を共にするのである。

天界地底在一几

⑤の教へ七

行止進退幾變転。

今日不記過去業。

昭昭琅琅一円鏡。

天皇國みくにで云ふところの「陵墓」はか

とは、現象世界を解き去り剖き來つたのだから、空で、無で、名を止めず、跡を遺さぬのが本義である。

宇宙の外に解けて無くなる

のが、本来「死者の願」である。

「宇宙の外」と云ふのは、先師の意に反するやうだが、私は便宜上、此の語を用ゐる。

「無い」とは、無いのだと、

先師は仰せられて、「宇宙の外」をば、お認めになられなかつた。

けれども、「無い」とは、「有る」に対して、はじめて成り立つので、「無い」のが有るのである。

それと同様に、「宇宙」は存在だから、それに対して、「宇宙の外」と呼ぶべく、「存在せざる宇宙」「無宇宙」を否定することはできぬ。

言ひ換えると、「無」と「有」と、或は、「宇宙」と「無宇宙」と云ふことは、相互に相互の存在を認めればこそ成り立つのだから、「宇宙の外」と呼ぶべき「無」を否定することはできぬ。

さうして、「無」(宇宙の外)と「有」(宇宙)との一致点にして、はじめて「カミ」(天地の神)(神魔同凡の \oplus)を見るのである。

かくて、断見常見の魔境を摧破し卓立することになる。

先師はまた、観門を掲げ、百八観より千八百八萬八億八百萬神観太神観をせよと教へられたが、改めて、「有」と「無」との一致点を説かれたことを聞かない。

やっぱり、「無いものは無いのだ」との信仰だったでせう。

かつて、「宇宙は球形だ」とのお話に対して、或青年が、宇宙が球形ならば、その外はどうかと質問された。

すると、「宇宙とは有らん限りだから、その外は無い。無いと云ふものは、また無い」との御説明であつた。

ここに云ふところの「宇宙」とは、蓋、「全宇宙」を指すのであらう。

全宇宙を假に描けば、 \oplus で、

球で、經と緯との存在たる筒體の「窮極」である。

筒體の「窮極」はまた、解體解脱の「窮極」で、有と無との「窮極」で、乃至、大と小との「窮極」で、一切合切の窮まるどころである。

則、「カミ」である。

判り易く形象を借りて云ふならば、「一圓鏡」であらうし、「一音響」でもあらう。それは、人間的身心の明らめ難き○である。

此の○と化ることなが、「死者の願ひ」で、死者の往くべきところで、決して、極楽(高天原)でも地獄(黄泉國)でもない。

如是の「極」である。

「極」には生死が無い。

死者を導きつつ、死生無き「極」(神界)に入らしむのが「死

者の齋り」で、此の齋事まつりが子孫

縁類つとめの任務である。

今は、説明の便宜で、「死者を神界に誘導する」と云ったが、事実としては、「消散滅却」の

後に、新しき⊕くにを築くので、そのまた、消散滅却と云ふのも、人間の不備な詞とする假の説明にすぎない。

形象を借りれば、○として、

その○が⊕なる内容の種子たねであることを明にし、更に、種子である⊕に由って新しき⊕くにと成し、新しき⊕と成るのである。

その累積したる人間世界で云ふならば、既に廃れたる旧邦を解いて、更に新邦を建てるのである。

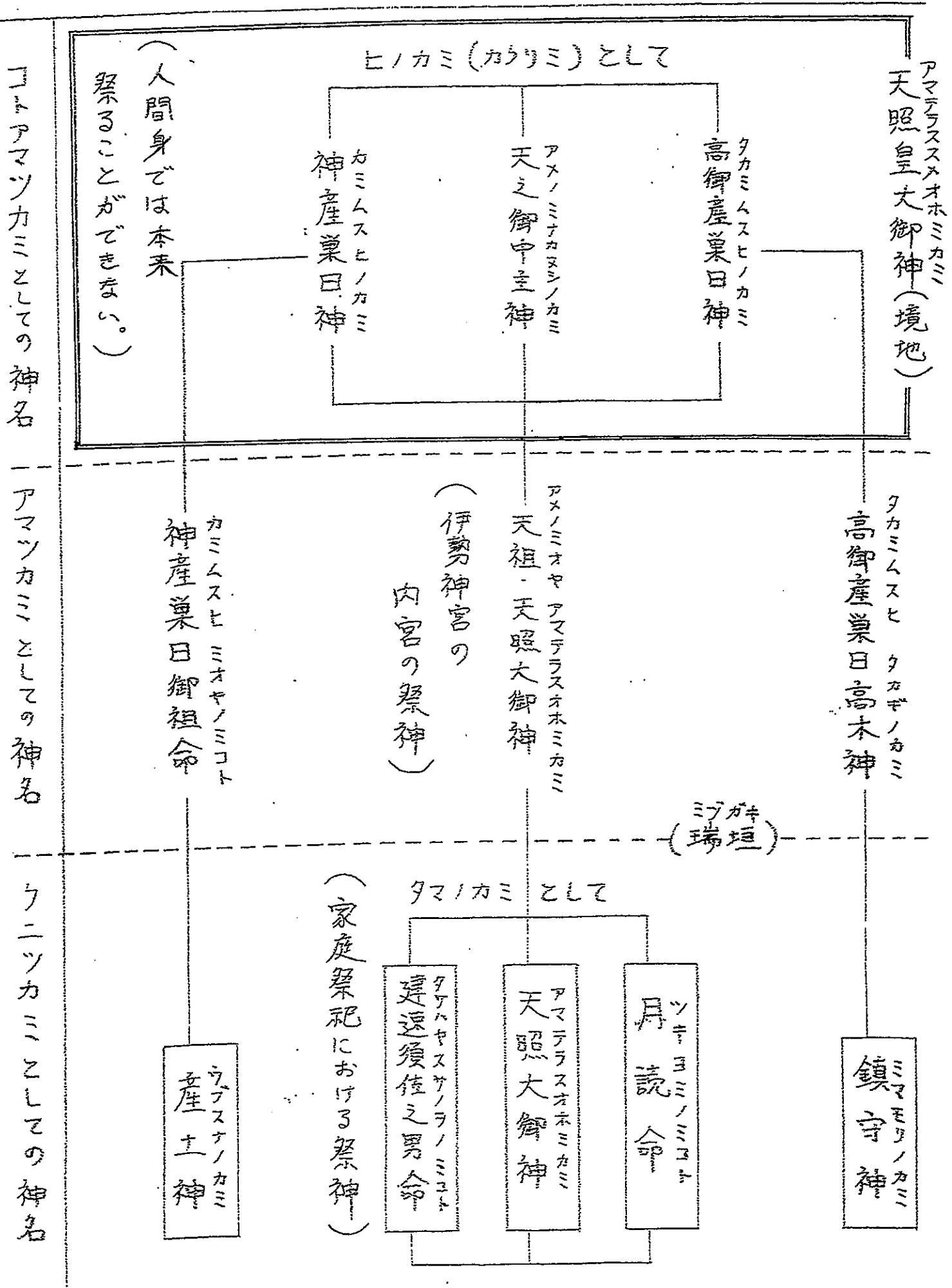
その解くのに、完全に、元の元の大元に帰らせるので、種子の種子の大元の種子である⊕を明にし、如是の⊕のままなる⊕とする。

此の場合に、○は……で、アマノミナカヌシノオホミカミで、⊕は……、スメミマノミコトにてましますのだと稱へて來たのである。

あなかしこ。

語るべからざることを語りたるが如くである。

図表：マハシラにおける三貴子



「火水」と「水火」の構造

「マハシラ」が含む概念

ヒミツリ

此の「マ」	○ヒ	イキ	生	天(アメ)	火	上る	ヒ	△
彼の「マ」	●ツキ	シニ	死	地(ツチ)	水	下る	ミヅ	▽

神	宇	時間	凸	経	チチ	魂	陽	イザナギ
魔	宙	空間	凹	緯	ハハ	魄	陰	イザナミ

カムロキ	ヨモツクニ	無宇宙	日	體	相乖離する状態	天地否	火水未済	正位	△△
カムロクニ	ナカツクニ	宇宙	月	活用	太平嘉悦の状態	地天泰	水火既済	逆位	▽△ ☒ ユ(湯)

多田流真柱神座・神名

カクレミ ↓ ウツシオミ ↓

裏	裏	左	表	右	裏	左	表	右	裏	左	表	右	表
ヒノカミ(コトアマツカミ)	神産巢日神	極大極小極無極之火	神産巢日御祖命		隱身天之御中主神	天照坐皇大御神	天祖 天照大御神	天照皇大御神	高御産巢日神		高御産巢日高木神	極大極小極無極之火	ヒノカミ(アマツカミ)
裏	裏	左	表	右	裏	左	表	右	裏	左	表	右	表
ヒノカミ(アマツカミ)	神産巢日御祖命		建速須佐之男命		天祖 伊邪那岐伊邪那美二柱御祖神	-	天照大御神		高御産巢日高木神	月夜見	月読命	月弓	タマノカミ(クニツカミ①)
裏	裏	左	表	右	裏	左	表	右	裏	左	表	右	表
ヒノカミ(アマツカミ)	天祖 伊邪那岐伊邪那美二柱御祖神		産土神(ミノカミ)		ミノカミ ← 五十年		沼田家御魂之常宮(ミタマノカミ)	極大極小極無極之火	天祖 伊邪那岐伊邪那美二柱御祖神		鎮守神(ミノカミ)		ミノカミ(クニツカミ②)

ツケ